埋蔵文化財調査報告書25

高　蔵　遺　跡(第8次・第9次)
桜台高校遺跡(第2次)
桜小学校遺跡
那古野山古墳(墳丘確認)

1996

名古屋市教育委員会

収録調査遺跡一覧

高蔵遺跡（第8次）

調査期間	1995年(平成7年) 2月22日～3月24日
調査位置	名古屋市熱田区高蔵町111
調査原因	個人住宅建築
調査面積	約120㎡
調査担当者	山田鉱一，平出紀男，木村光一

高蔵遺跡（第9次）

調査期間	1995年(平成7年) 4月3日～4月28日
調査位置	名古屋市熱田区沢上二丁目4－11
調査原因	個人住宅建築
調査面積	約160㎡
調査担当者	山田鉱一，伊藤正人，伊藤厚史

桜台高校遺跡（第2次）

調査期間	1995年(平成7年) 3月9日～3月30日
調査位置	名古屋市南区霞町28－2
調査原因	個人住宅建築
調査面積	約120㎡
調査担当者	松村冬樹，水野裕之，服部哲也

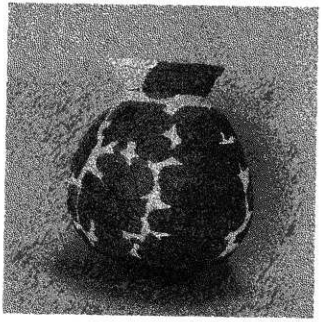
桜小学校遺跡

調査期間	1995年(平成7年) 2月13日～2月21日
調査位置	名古屋市南区桜台一丁目1501－2
調査原因	個人住宅建築
調査面積	約50㎡
調査担当者	松村冬樹，水野裕之，服部哲也

那古野山古墳（墳丘確認）

調査期間	1995年(平成7年) 1月30日～2月2日
調査位置	名古屋市中区大須二丁目1903
調査原因	公園整備
調査面積	約11㎡
調査担当者	水野裕之，服部哲也

高蔵遺跡(第8次・第9次)



例　言

1．本編は、高蔵遺跡の第８次及び第９次発掘調査の報告である。第８次発掘調査は、名古屋市熱田区高蔵町111において平成７年(1995年)２月22日から平成７年(1995年)３月24日にかけて約120㎡を対象に実施した。第９次発掘調査は、沢上二丁目４-12において平成７年(1995年)４月３日から平成７年(1995年)４月28日にかけて約160㎡を対象に実施した。

2．調査は、愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに、名古屋市教育委員会が実施した。発掘調査に係わる調整事務は、教育委員会文化財課学芸員小島一夫が担当し、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員平出紀男・山山鉱一・木村光一(第８次発掘調査)、山田鉱一・伊藤正人・伊藤厚史(第９次発掘調査)が担当した。発掘調査の排土工事請負業者は、株式会社浅井造園(第８次発掘調査)、大崎園芸有限会社(第９次発掘調査)である。

3．調査に用いた基準高は、東京湾の平均海面(T.P.)、座標系は建設省告示による第Ⅶ座標系である。基準点測量・水準測量は、カナエ測量設計株式会社(第８次・第９次発掘調査)に業務委託した。現地での遺構平面図作成は、平板測量による。現地写真は各担当者が、遺物写真は平出(第８次調査)、伊藤厚史(第９次調査)が撮影した。

4．遺物の整理、遺物実測図作成は、佐々木佳子・倉橋敦子・中嶋理恵による。製図は、中嶋による。出土遺物について、水野裕之、村木誠、尾野善裕各氏のご教示を得た。

5．出土遺物や調査にあたり作成した実測図、写真類は、名古屋市見晴台考古資料館で保管している。

6．調査の実施にあたり土地所有者である山田克氏(第８次調査)、長谷川清弘氏(第９次調査)には調査に対して深い御配慮をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

7．本編は、第２章を平出紀男、第１章、第３章を伊藤厚史が執筆した。編集は伊藤による。

目　次

第１章　遺跡の概要

１．遺跡の位置……1

２．高蔵遺跡の調査史……1

第２章　第８次発掘調査の概要

１．調査の経過……5

２．検出遺構……6

３．出土遺物……12

４．小結……17

第３章　第９次発掘調査の概要

１．調査の経過……18

２．検出遺構……19

３．出土遺物……28

４．小結……34

●は高蔵遺跡の位置

挿図目次

（　／　）は縮尺

第１図　遺跡の位置（１／50,000）……1

第２図　熱田高倉貝塚……2

第３図　貝塚の分布……2

第４図　高蔵遺跡調査地点（１／3,000）……3

第５図　土器出土状況実測図（１／20）……7

第６図　遺構平面図（１／100）……8

第７図　出土遺物実測図（１／４）……13

第８図　出土遺物実測図（１／４）……14

第９図　遺構平面図（１／100）……20

第10図　土層図（１／50）……20

第11図　遺構図・土層図（１／50）……22

第12図　遺構図・断面図（１／50）……24

第13図　遺構図（南半分）……25

第14図　遺物実測図（１／３・１／４）……30

第15図　遺物実測図（１／４）……31

第16図　区画整理前後の状況……36

表目次

第１表　調査年表……4

第２表　遺構一覧表(1)……26

第３表　遺構一覧表(2)……27

第１章　遺跡の概要

１．遺跡の位置

高蔵遺跡は、東西約500ｍ、南北約700ｍに及ぶと推定されている。現在の町名では熱田区高蔵町を中心として、北は沢上一丁目、二丁目、花町、東は外土居町、西は五本松町、南は夜寒町にかけて所在する。遺跡は標高７～10ｍを測る熱田台地に立地する。熱田台地は、幅約700ｍの半島状に形成されており、東縁は、旧精進川流域の沖積地に、また西縁は濃尾平野に面する。

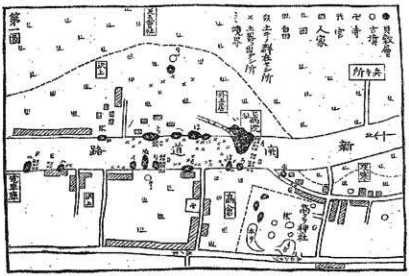
２．高蔵遺跡の調査史

高蔵遺跡の調査は、明治41年(1908年)にまで遡る。それまでも高座結御子神社境内及其周辺畑地において貝殻が散乱し、また石器や土器の破片等が採集されており、石器時代の遺跡として知られていた。さて、明治40年(1907年)に熱田町が名古屋市と合併したことから、交通の便を計るため大津町通を改築することになった。同年冬から始められたこの工事により、多数の土器が出土したことが、翌年１月になって鍵谷徳二郎氏の知るところとなった。教員であった氏は、余暇をさいて土器と貝層との関係を調査し、土器と石器及び貝層が同一の時代のものであることを確認した。この時の調査は、1908年５月発行の「尾張熱田高倉貝塚實査」として『考古界第７篇第２號』と『東京人類學會雑誌第23巻第266號』に報告された。極めて迅速かつ詳細な報告である。

鍵谷氏の調査以後、パレススタイルと呼ばれる丹塗りの土器や馬の骨、人骨が出土することから、学会に注目され、徳川義親、小金井良精、柴田常恵、清野謙次、直良信夫、小栗鉞次郎、酒詰仲男各氏等により小規模な発掘が行われた。

第１図　遺跡の位置　黒印は調査地　　国土地理院 50,000分の１地形図 名古屋南部

戦後になり、1950年代には田中稔氏、南山大学、名古屋大学などによる調査が相次いで行われた。中でも田中稔氏による調査報告『高蔵貝塚』(1954年刊)は、これまでの調査について貝層や遺物の出土する地点(A～J地点)毎に内容を整理し、高蔵遺跡の空間的広がり及び時期的変遷を押さえられた。この報告は以後の調査の基本文献となっている。

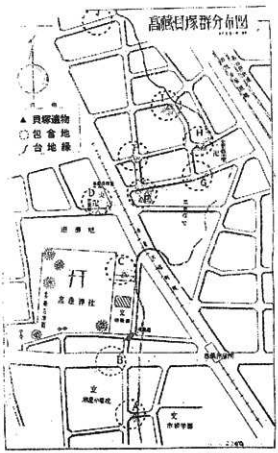


第2図　熱田高倉貝塚　　『考古界7－2』1908より

1960年－1970年代は、高蔵遺跡調査に動きはなかった。1981年、南山大学を主体とした高蔵遺跡調査会によって行われた調査を皮切りに再開発に伴う調査が行われるようになった。

1981年に行われた高蔵保育園内の調査は、弥生前期の弓状に曲る溝や弥生後期の方形周溝墓などを検出した。これまでは遺物の情報が先行していたが、対してようやく遺構の情報が蓄積されるようになった。

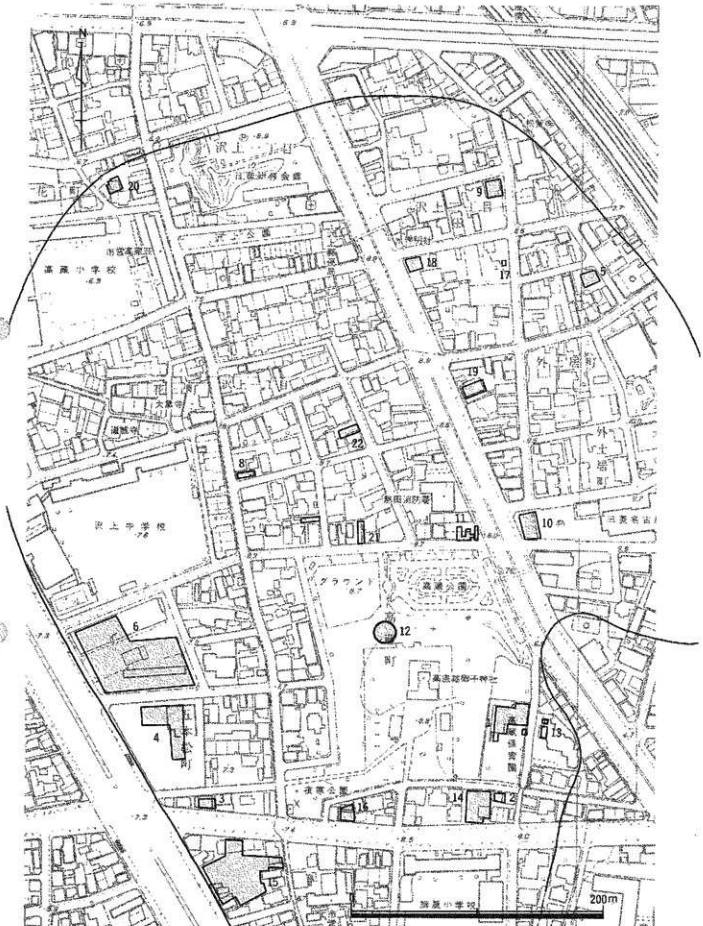
1985年に行われた夜塚地区調査会(代表重松和男)による調査は、弥生前期の溝、後期の方形周溝墓のほか古墳時代前期の住居跡を検出した。古墳時代については、高座結御子神社境内付近に所在する後期古墳が知られていたが、前期の集落の一部が知られるところとなった。



第3図　貝塚の分布　　『高蔵貝塚』より

1985年～1990年にかけて行われたマンション建設に伴う調査(代表荒木実)は、16基の方形周溝墓を検出した。従来の遺跡の様相について、主として遺跡範囲の東半部について注意がなされてきたが、西半部にも弥生時代後期の遺構(方形周溝墓)が存在することが明らかになった。報告書にもあるように墓域がいくつかの群として存在する可能性が高まった。

また古墳時代についても、1987年、1989年、1994年に行われた調査では、墳丘が滅失した古墳が検出された。これまでは、現存する古墳のほかは古図に描かれた古塚が当地域に存在する古墳を知る唯一の手がかりであったが、埋没古墳の検出により古墳時代後期の古墳群の存在が注目されるようになり、高蔵遺跡の南方に所在する断夫山古墳や白鳥古墳など前方後円墳との関係を明らかにすることが新たな課題となった。



第4図　高蔵遺跡調査地点（S＝1/3,000）

図番号	調査年	調査地	調査者	所見	現状	文献
	1908	大津通	鹿谷熊三郎	貝塚、弥生土器、石器、馬骨		鹿谷1908
	1913		井上(銀屋小校長)	弥生土器、人骨		
	1916		安藤清次郎	弥生土器、人骨		
	1917		徳川義親			
	1917		佐藤龍一			佐藤1918
	1919		小金井良精・柴田雲峯	溝、弥生土器		
	1919		清野謙次	貝塚、弥生土器		清野1925
	1927	外土居町	浜良信夫	貝塚		
	1928	熱田東町(田町名)	小笹嶺次郎・伊藤文四郎	貝塚、弥生土器		
	1940	高畑町60	梅本鶴一	弥生土器		田中1954
	1941		浦益智男	溝、縄文土器、弥生土器		浦益1967
	1942		高橋信	竪穴、弥生土器		田中1954
	1946		荒村宗			
10	1951	外土居町12(E地点)	田中稔	溝、貝層、弥生土器	会社建物	田中1954
	1951	外土居町	渡田正一	溝、貝層、弥生土器		渡田1955
11	1953	高畑町62(D地点)	中山英司	溝、貝層、弥生土器	高層マンション	伊藤1979
12	1954	高畑1号墳	増田修一	古墳(横穴式石室)	滅失	増田1955
11	1956	D地点	福田晋也	溝、弥生土器、人骨	高層マンション	南山1985
13	1981	高畑町1001-2	高畑遺跡調査会(会長伊藤秋男)	住居跡、弥生～近世陶器	高層マンション	南山1982
1	1981	高畑町 9－7	市教育委員会(第1次調査)	溝、周溝墓、弥生土器	高畑保育園園舎	見晴1982
2	1982	夜寒町70	市教育委員会(第2次調査)	溝、弥生土器、須恵器	民家	見晴1983
14	1985	夜寒町204	夜寒地区調査会(代表張松和男)	溝、周溝墓、住居跡、弥生土器、土師器	民家	南山1985
15	1985	五本松町11	荒木実(第1次調査)	周溝墓、弥生土器、中世陶器	高層マンション	荒木1986
15	1986	五本松町11	荒木実(第2次調査)	周溝墓	第1次調査に同じ	荒木1987
15	1987	五本松町11	荒木実(第3次調査)	弥生土器、中世陶器	第1次調査に同じ	荒木1987
16	1987	夜寒町102	夜寒町遺跡調査会(宮木宗治)	周溝墓、溝	会社建物	夜寒1988
3	1987	五本松町1002	市教育委員会(第3次調査)	中世道構、中世陶器、瓦	会社建物	見晴1988
17	1987	沢上二丁目509	市教育委員会(試掘)	溝、弥生土器	空き地	
18	1988	沢上二丁目501	荒木実	住居跡、弥生土器、土師器	駐車場	荒木1989
19	1988	外土居町1－21	市教育委員会(立合調査)	溝、弥生土器	会社建物	
4	1989	五本松町901	市教育委員会(第4次調査)	古墳、土師器、須恵器、中世陶器	スポーツ施設	見晴1990
15	1989	五本松町11	荒木実(第4次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
15	1990	五本松町11	荒木実(第5次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
15	1990	五本松町11	荒木実(第6次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
15	1990	五本松町11	荒木実(第7次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
10	1991	外土居町7－36	市教育委員会(立合調査)	溝、弥生土器、貝層	会社建物	
20	1993	花町6-15	高畑遺跡(花町地区)調査会(中嶋煙恵)	墳、谷、弥生土器、須恵器	高層マンション	花町1994
5	1993	沢上二丁目704	市教育委員会(第5次調査)	溝、弥生土器	コミュニティーセンター	見晴1994
21	1993	高畑町510	市教育委員会(立合調査)	溝	店舗付共同住宅	
6	1994	五本松町7-20,30	市教育委員会(第6次調査)	周溝墓、古墳、弥生土器、須恵器	NTT建物	見晴1995
7	1994	高畑町6-10	市教育委員会(第7次調査)	溝、墳墓、須恵器	個人住宅	見晴1995
22	1994	高畑町203	市教育委員会(立合調査)	溝	個人住宅	
8	1994	高畑町1-17	市教育委員会(第8次調査)	溝、弥生土器、須恵器	個人住宅	本書
9	1995	沢上二丁目4-12	市教育委員会(第9次調査)	土坑、弥生土器、須恵器	個人住宅	本書

第1表　調査年表　　番号は第4図番号に対応　文献は主要参考文献P35参照

第２章　第８次発掘調査の概要

１．調査の経過

調査地点は、遺跡範囲のほぼ西寄り中央に位置する。個人住宅改築に伴う発掘調査である。旧裏宮通り沿いに位置し、街区南西角地にあたる南北約７ｍ、東西に約20.5ｍと細長い敷地であった。道路に官民境界鋲及びＬ字形溝が設置されていたため、約50cm程控えた。都合、調査区は約120㎡となった。調査に至る前には、文化財課が試掘調査を実施しており、表土を除去すると直ちに地山(熱田層赤褐色粘性質土層)が露呈し、地山面に掘り込まれた遺構も少ないとの情報を我々は受けていた。調査期間は、２月22日から３月24日までであった。

表土除去を実施した結果、試掘調査と同様に直下に地山面が、調査区全体にわたっていた。表土の厚さは、平均して20～30cmである。包含層はほとんど残存していなかった。表土除去中に、調査区南西隅で須恵器壺または小型甕と思われる破片群が検出された。また、調査区中央でも、弥生時代と思われる土器が、良好に集中して３点検出された。また、調査区東端から７ｍ西までは、ほぼ全体に攪乱されており、その後の掘削に伴う排土置き場として利用するために深く掘削した。

包含層が残存していないため、遺構検出を行ったが、丁度、前夜に降雨があり、地山面が濡れて検出するには良好な状況が２回ほどあったため、意外に早く終えた。その結果、明らかに新しい時期に掘り込まれた土坑及びピットを含めて多数の遺構が検出された。特に既述した弥生時代の土器群をほぼ境目にして、それぞれ調査区が狭いため部分的に緩やかな楕円形を描く溝跡２条(北側をSD01、南側をSD02と命名)、その両溝の掘り方を切っている土坑(SK05)、調査区南西隅でSD02を切っている遺構(SX02)と多数のピットを検出した。それぞれの遺構埋土を記録し掘削するが、上述の遺構外からは遺物はほとんど出土しなかった。SD01は、上端の遺物群を除いて掘削したが、その底部からもほぼ完形に近い短頸壺、さらに北西側下端から底部だけの土器が出土した。それとは反対に、SD02からは遺物はほとんど出土していなく、調査中の段階ではSD01との時期差は不明であった。また、調査区北東端から始るSX03及びSX04は、徐々に北へ落込み、調査区北端壁際では深さ約50cmとなる。埋土は茶褐色砂シルトで、SD01を切って約２ｍ西で北端壁へぶつかる。SD01は北西隅でもSX01によって切られている。調査区東の攪乱坑からは、焼けた瓦、土砂等を大量に含んでいるところから戦災物廃棄坑かと思われた。

遺構仕上掘削を大体終了し、検出された上述の遺物群を箒及び刷毛で全形を明らかにする作業に移行した。表土除去中の遊離した遺物片は、それぞれの遺物番号を付けて取上げた。まとまって出土しているのはSD01からで、出土レベルは上端及び下部付近であった。出土状況を平面図化し(第５図)、個々の遺物に対してレベルを注記した。また、SX02から出土した須恵器は表土除去の際に大半の破片が動いた状態で出土しており、同様に取上げた。本来の位置を有した破片は少ないが、かなりの範囲で広がっており、出土レベルは底部から約30cm程上で比較的埋土上部であった。これらの遺物群を清掃し写真撮影を行い、一個体毎に取上げた。これで調査区全体の遺構掘削を終了した。直ちに清掃を行い、調査区全景及び各遺構の部分写真撮影を実施した。調査区全体の遺構平面図を作成し、全体のエレベーションを記入して特に必要な遺構に対しては、輪切りを行った。最後に記録した遺構表を現地で照し合せて確認し、現地調査を終了した。

2．検出遺構

今回の調査で検出された遺構としては、攪乱を含めて土坑３基、調査区が狭く全形及び性格が不明な遺構４基、溝跡２条、ピット115基であった。検出した地山面は、土器群の上部が欠損していることから、正確には言えないが本来の地山レベルよりは低かったと思われる。調査区東部分でSD02より北へ約50cmの所で浅い段が東へ２ｍ続いているが、これは文化財課が実施した試掘坑の跡であった。各遺構ごとに述べる。但し、明らかに攪乱と判明しているのは省略する。

ＳＫ 05

形状は現存で東西に延び、短辺が1.7ｍ、長辺が3.7ｍの長方形である。深さは約25cmで、掘り方が緩やかな傾斜をもつ土坑である。北壁は、SD01の土器群がほとんど欠損していない事からも本来の位置とさほど離れていなかったと思われる。既述したように、SD01･SD02を切っており、このことが両溝の新旧関係を不明にしている。埋土は暗茶褐色砂シルトであり、出土遺物は須恵器壺胴部片、脚部片、土師器片であった。

ＳＸ 01

調査区北西部で検出され、調査区北側へ徐々に落込んでいく遺構で、全形は不明である。北端から南へ約1.6ｍの所が遺構上端で東西方向に延びSD01の上端と交わる。最下部は同様に調査区北壁端で上端から約50cmの深さであった。埋土は灰茶褐色砂シルト質土で小礫粒及び焼土ブロック(径0.5～１cm大)を若干多く含んでいる。SD01の西側上端も、交わった点からSX01の掘り方と同様に下がっていき、北１ｍのところでSX01の下端とぶつかって、それより北側は消滅している。また、SX01の上端の続きは図上では判然としないが、SD01の東上端もやや不整形になっていることから、この遺構はSD01を切っている。出土遺物は少なく、常滑甕製品破片１点しか出土していない。

ＳＸ 02

調査区の南西端で検出され、これも全形は不明で、形態は現存でやや南西に傾く南北に長い楕円形を半載した様なものである。表土除去中からほぼ完形の状態で須恵器甕または甑が一個体検出され、早くも存在が知り得た遺構である。これもSD02を切っているのが確認されている。この遺構も掘り方が緩やかな傾斜を有し、深さは約26cm前後である。埋土は均質の淡灰茶褐色砂シルト質土である。SD02上部からも須恵器片が出土していたが、これらはSX02の遺物と考えられる。出土遺物としては、須恵器甕胴部片、杯蓋及び身底部片、土師質円筒埴輪片、土師器片がある。その他に径15cm大の真ん中で割れた河原石があり、外側全面が焼けた痕跡がある。但し、割れ口にはその痕跡が無い。

ＳＸ 03

調査区の大攪乱坑以西で調査区北壁から約１ｍ南の所が上端であり、東西方向に延びている。途中SD01を切り、SD01の西側上端と交わる。全長9.8ｍで北へ落ちる遺構である。段差は約25cm位である。埋土は、淡茶褐色砂シルト質土である。出土遺物は近世の時期と思われる鉄釉、無釉で赤褐色の胎土を有する破片、土師器片の３点のみであった。

ＳＸ 04

SX03と同様に東側攪乱坑から始り、ほぼSX03の範囲中にある。SX03の下端が即ちSX04の上端となっている。東西に走向し、途中戦災攪乱坑によって切られるがSD01を切って北壁に潜っていく。現存長さ約

8.5mで、段差約25cm前後で北に落込んでいく遺構である。埋土は茶褐色砂シルト質土であった。

ＳＤ01

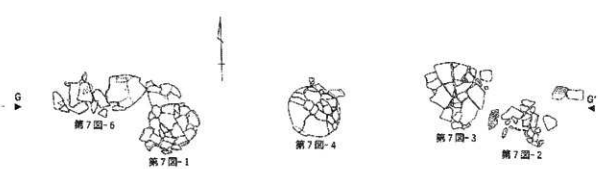
調査区中央北側に存在し、上端幅0.9mから1.3mの深さ約40cmから50cmの溝跡で東西に約７mの両端で北側に折れ曲がった形状である。表土除去中から上端のレベルで土器が良好な状態で３点発見され、SX02と同様早くから注目されていた。埋土は灰茶褐色砂シルト質土である。北側に折れ曲がる溝部分は、北壁付近でSX01・04・05によって切られている。下端はそれぞれコーナー部分が若干隆起し、終結しているのが確認されている。下端幅は、30cmから60cmと中央で膨らんだ形状であった。掘削すると上部の土器群の下から完形に近い土器が２点出土している。さらに、北西側溝底部から底部だけの土器が出土している。上下の土器群の出土状況を実測し、出土レベルを計測した。

ＳＤ02

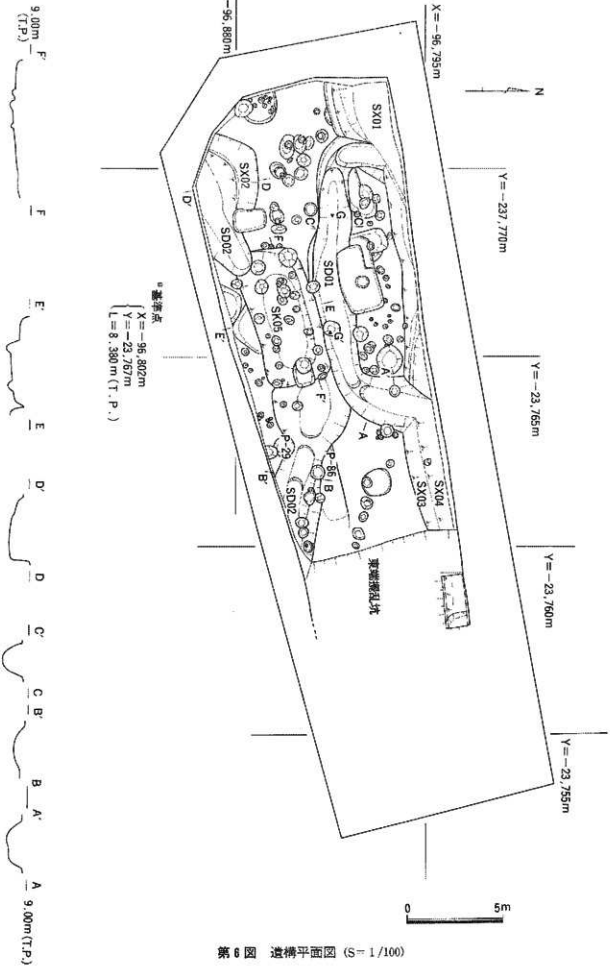
調査区中央南側に本来あったものと思われるが、SK05、SX02によって切られて調査区南壁近くで両側とも若干残存しているにすぎなかった。SK05の東部分でやや円形に近い土坑状は、SD02との切り合い関係については出土遺物がないことから不明であったが、本来のSD02の掘り込みでは無かった。深さ約20cmから25cm位であった。SD02の掘削段階で検出されているが、直径約２m、下端0.9mを計測する。西端部分がSK05によって切られているため、時期はSK05以前と判明している。この土坑状遺構については命名をしていない。本来のSD02の形態を有している部分は東西端にあり、東側の北側上端では大撹乱坑から西へP86まで約2.2m、南側上端は南壁からP29までの0.5mと短い。それに比して下端は0.46mの幅で2.1m北西に向かっている。西側端では、SK05上端から南北上端が始り、北側上端はSX02内の撹乱坑によって切られ、0.6mしか残存していなかった。南側上端も調査区南壁に潜っていき現存で約0.9mと短い。下端は、SK05及びSX02底部よりも深かったため幅約0.5mで南西端から2.6mと長かった。埋土は暗褐色砂シルト土で、SX02部分では比較的上層から須恵器破片が出土している。他には、弥生時代の土器片が出土している。

ピット

上述の遺構の他に、ピットが115基検出されている。その内、29基は明らかに撹乱のピットであった。遺物が出土したのは３基であり、いずれも土器片であつたが、P22では須恵器片も含んでいた。



第５図　SD01土器出土状況実測図(S＝1/20)



第6図　遺構平面図（S＝1/100）

写真1　発掘区全景（東から）

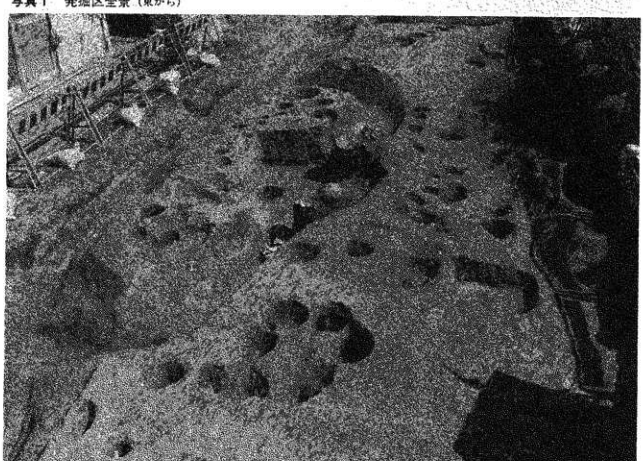


写真2　発掘区全景（西から）

写真3　遺構検出掘削工（東から）

写真5　SD01上端 遺物出土状況（北から）

写真7　SX02内 遺物出土状況（北から）

写真9　SD01上端 遺物出土状況（南から）

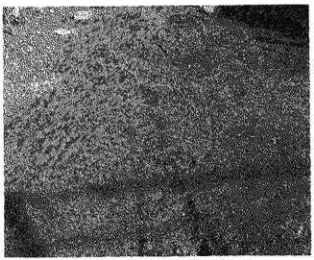


写真4　遺構検出掘削工終了直後（西から）

写真6　SX02掘削終了状況（北から）

写真8　SD01出土遺物検出作業風景（西から）

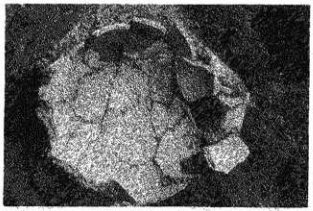


写真10　SD01上端 遺物出土状況（南から）

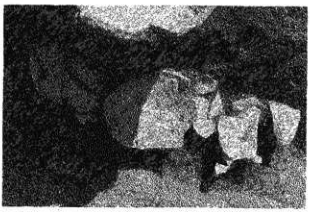


写真11　SD01上端 遺物出土状況（南から）

写真12　SD01上端 遺物出土状況（西から）

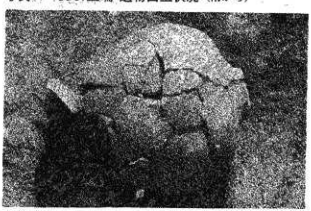


写真13　SD01下部 遺物出土状況（西から）

写真14　SD01下部 遺物出土状況（東から）

写真15　SD01東側溝下端 遺物出土状況（南から）

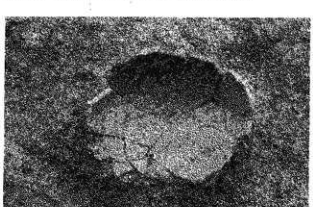


写真16　SD01下部東側溝内 遺物出土状況（南から）

3．出土遺物

出土した遺物はコンテナケース５箱分であった。出土した遺構ごとに記述する（第７図・第８図・写真17－27）。

ＳＤ01（第７図）

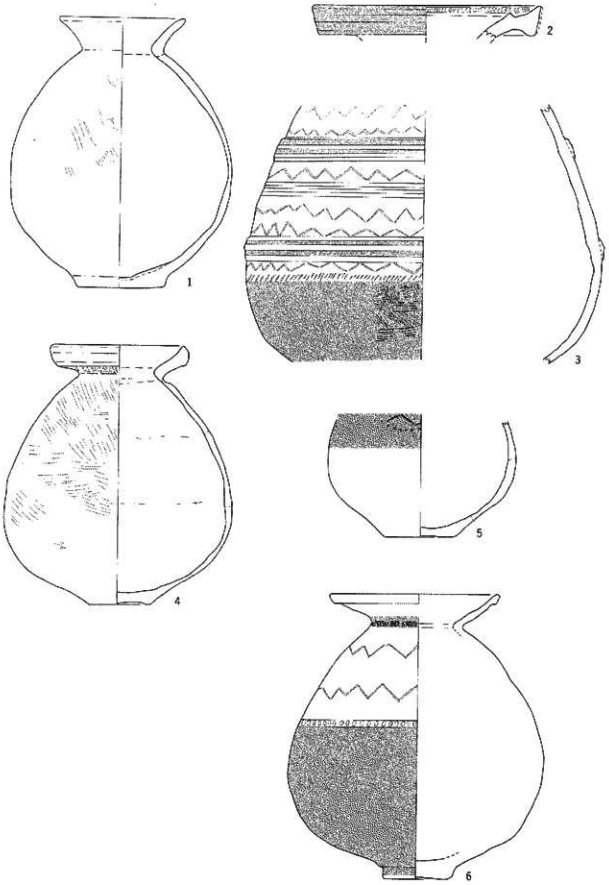
SD01から遺構底部から出土した２点と表土除去の段階で早くから確認されている４点とがある。いずれも器形は壺であった。なかには、胴部に部分的に丹彩がほどこされたパレス式土器もある。いずれも下ぶくれの胴部を有している。１は無文で、口部を大きく外反させ端部をそのまま丸く収めている。胴部最大幅は23.4cmで他のものと較べてやや上位にある。口径13.4cm、底径9.2cm、器高28.4cmである。２と３は溝上端で検出したものであるが、両遺物群が接近しており、当初は別個体として扱っていたが、復元するに同一個体のものと考えられる様になった。口部は内側の縁帯が隆起する様に発達しているのが看られる。また、同個体の破片から口部上端に梅状浮文が施されている。内側の上端面には櫛目による破線文、胴部は、上下に２本の凸帯を設けて、それぞれの凸帯の上下に山形状の破線文、最下では梅目の列点文が施されている。口径24.4cmである。遺物群中最も大きな破片である。４は無文であるが、口部は大きく外反させ先端を肥厚させており、反対に胴部は薄い。頸部に縦方向の削り降痕が看られるが、その後回転ナデが加えられた跡がある。胴部外表には、縦・横方向に条痕線文が描かれている。内壁下半部には回転ナデ痕が看られる。口径14.8cm、底径6.5cm、胴部幅24.2cm、器高27.2cmである。５は底部から胴下半まで残存している。胴部残存上端で山形状の破線文があり、それを巡って列点文が施されている。底部には布若しくは蓆状の痕跡が看られる。胴から上はSX01によって欠損していると思われる。底径7.4cm、胴径19.7cmである。６は５と同じく溝底部から出土したものである。口部は大きく外反させ、端部をやや肥厚させたものである。胴上半部に山形状の破線文と中央に列点文を施している。口径18.0cm、底径7.2cm、胴径27.0cm、器高29.9cmである。

ＳＸ01（第８図）

一点出土している。１は常滑窯産の甕胴部破片である。外表は赤茶褐色を呈し、裏側は暗灰褐色の露胎である。

ＳＸ02（第８図）

２は須恵器横瓶の破片で、口部は欠損している。所謂、俵形の胴部で閉塞部を有している。胴部１箇所のみ接合できたが、器形の復元はできえなかった。胴部には横斜め方向に櫛目の条痕線が施され、一部に灰緑色の降灰釉が付着している。これと類似するものは、高蔵遺跡第６次発掘調査SD13から出土した６世紀代と推定されるものがある。３は杯蓋の中央部の破片で、偏平な紐みを有する。内外表は灰橙白色で降灰釉はかかっていない。胎は灰青白色で砂礫粒を含んでいない。裏側に×状の窯印があるが、破片であることから全体の窯印は判明できない。５は小河原石で外表面に焼かれた赤味を呈する。もともと、河原石は割られた状態であり、丸い先端は一辺部分のみが残存して他の面は打ち欠けられている。その断面には外表から0.2cmの幅で赤味を帯びた痕跡があり、何回も使用されているのが看られる。４は古墳時代の土師質の円筒埴輪の小破片である。突帯部は欠損し、それより上は縦位、内側にも横位及び斜位の条痕線が施されている。胎土は中央が灰青白色で、両外表近くで灰赤褐色となり小砂礫粒を若干多く含んでいる。その他に図化できなかったものとして須恵器甕胴部片がある。



第7図　出土遺物実測図（S＝1／4）

S K 05(第8図)

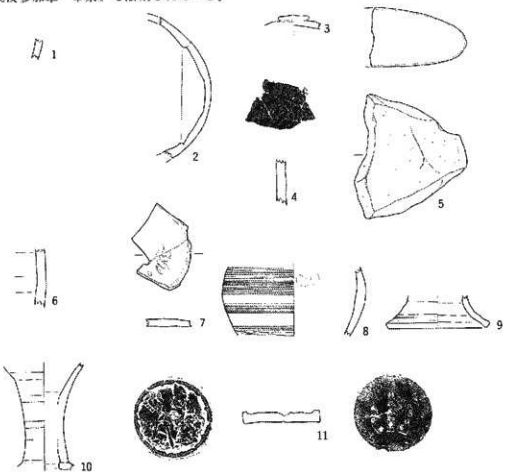
8は須恵器壺胴部片で上下とも欠損している。胴部には均等に細い沈線を3箇所に入れ、上部沈線本数は多い。外表は灰褐色で内側は灰白色を呈する。胎土は灰白色で小砂粒を若干含んでいる。恐らくこの個体に属する破片があり、肩部にあたり太い沈線を2本施し、その上に叩き目があるものである。9は須恵器脚部破片で、外側は突帯より上に灰緑色の降灰釉がある。内側は灰青白色で、胎土は灰青褐色で小砂礫粒を多く含んでいる。この破片と前述の破片とは胎土及び内側の調整痕が異なっているが、同一個体の可能性を否定することはできない。

P22(第8図)

P22はSX02内上端で検出されているが、SX02を掘削すると消失してしまった遺構であった。7は須恵器で器形不明の底部片である。内側は中央に向かって指圧痕が施されている。6は壺・瓶の胴部片である。内外とも灰茶褐色で外表はやや黒すんだ部分もみられる。胎土は淡灰茶褐色で小砂礫粒を多く含む。産地は不明。

東端攪乱坑(第8図)

10は須恵器長頸瓶の口部で、口縁部は欠損している。外表には暗灰緑褐色の降灰釉がかかり、内側も上端にもある。胎土は灰青褐色で小砂礫粒はあまり含んでいない。外表には数本の細い沈線がみられる。11は土師質製品で、表には神像(日本武尊か)が剣を所持しているポーズで陽刻されている。また裏面には『熱田神宮　競技参加章　奉祭』と陰刻されている。



第8図　出土遺物実測図 (S=1/4)

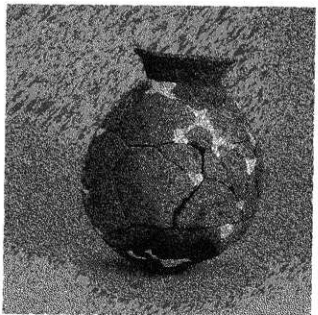


写真17　SD01出土土器（第7図1）

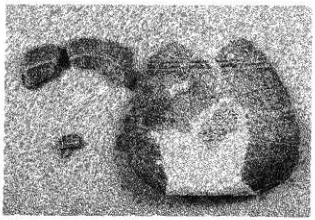


写真18　SD01出土土器（第7図2・3）

写真19　SD01出土土器（第7図4）

写真20　SD01出土土器（第7図5）

写真21　SD01出土土器（第7図6）

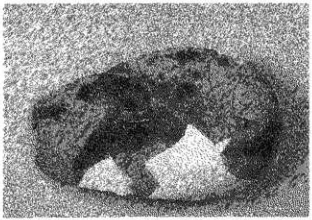


写真22　SX02出土横瓶（第8図2）

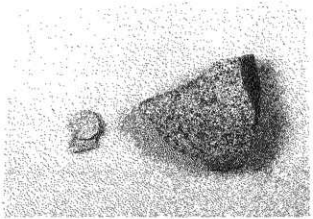


写真23　SX02出土須恵器杯蓋・河原石（第8図3・5）

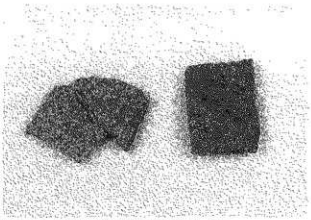


写真24　P22出土須恵器（第8図6・7）

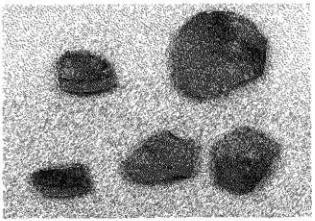


写真25　SK05出土須恵器（右上、第8図8）

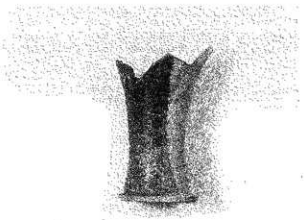


写真26　須恵器長頸瓶（第8図10）

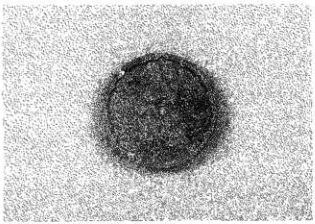


写真27　土師質製品（第8図11）

4．小　結

今回の調査は、面積が少ない割には色々な遺構が検出されている。それぞれの遺構は、残念ながら全形は不明であり、従ってこれらの遺構に対して正確な性格付けをするには些か躊躇するが、敢えて述べてみる。SD01から出土した土器の壺群は、いずれも下ぶくれ気味の胴部を有している。パレス形の壺としては、口縁及び胴部の装飾文様は廻間Ⅱ式の様相を示している。無文の壺〔広口壺〕は口部の作り方がパレス形と異なっているが、いずれも同時期の特徴を示している。これらから溝の一括遺物として取り扱うのが妥当であると思われる。さて、この溝は、走行から方形周溝墓と調査時の段階から考えられたが、出土遺物が同時期の可能性が得られることから、ほぼ間違いないと思われる。

SD02からは土器が数片しか出土していなく、時期の特定は出来ない。遺構の切り合い関係から少なくともSK05・SX02以前であり、走行からSD01と同じく方形周溝墓の一部と思われる。

SK05からは古墳時代の須恵器片が数点出土している。胴部が球形を示すものであるが、器形は壺と思われる。その他に脚部片があるが、高杯の一部とも考えられる。しかしながら、前述したようにこれらの破片が同一個体の可能性があり、若しそうであるなら脚付の壺とも思われる。胴部須恵器片の外表には、上部に細沈線が数本施されている。古墳時代の比較的古い須恵器群と思われる。

SX02からは比較的多く遺物が出土している。SD02を切っている遺構であった。ここからは土師質円筒埴輪片など古い遺物を含むが、扁が偏平状である杯蓋の存在があり、新しい時期に属する須恵器片が出土している。東端の攪乱部の排土中から出土した長頸瓶口部が、この遺構から出土したものと推測し得る。SX02は少なくとも杯蓋の存在から6～7世紀代に属するものと考えられる。

以上の様に、この調査地区は古墳時代の方形周溝墓が2基あり、その後古墳時代後期になるとSK05が代表されるように性格は不明の土坑がある。また、その後空白期があり、やや古い遺物をも含むが古墳時代末期の土坑状の遺構が出現する様である。

第３章　第９次発掘調査の概要

１．調査の経過

平成７年４月３日、土地所有者の長谷川氏と文化財課小島、考古資料館の伊藤の三者で現地で立合い、住宅建築予定地(調査区域)を確認する。午後、器材等搬入する。４月４日は、小型バックホウで表土除去を行う。個人住宅敷地内の調査で、排土は積み置き、調査後埋め戻しを行うため、調査区を２区に分けて行う。北側から行うことにする(前半区)。表土層は薄く１日で終了する。４月６日は、包含層掘削に入る。調査区の北西部で黒色土が堆積していたが、それ以外ではみられなかった。基準点測量杭設置。４月７日から遺構検出、遺構掘削に入る。北西部の黒色土は、比較的固く締った土が広がる箇所と柔らかい土の部分に分れる。固く締った部分は弥生時代の土坑で、柔らかい部分は近世～近代の土坑であった。４月10日は、検出した遺構の掘削を行い、ほぼ完掘する。調査区北壁、東壁の断面図を作成する。４月11日は、清掃、写真撮影を行い、平板測量で遺構平面図を作成する。４月12日は、午前中雨のため作業中止。午後現地にて平板測量の補測とレベル値を計測する。風が強く寒い、つらい半日であった。４月13日は埋め戻しを行う。４月14日は、雨天のため作業中止。４月17日は、南側の表土除去を行う(後半区の調査)。４月18日は、包含層掘削を行う。主として建物基礎や排水管埋設溝、瓦溜め坑を掘削する。４月19日は、雨天のため作業中止。前半区と比較して遺構が格段に多く、天気が気になり出す。４月20日は、遺構検出を行い、遺構一覧図を作成する。４月21日は、主として東半分の遺構を掘削する。大型の遺構はなくほとんどがピットである。それも深い穴が多く手間取る。調査区東壁及び南壁の土層図作成する。４月24日は遺構の掘削と並行して平板測量を始める。残された時間は、今週を残すのみ。４月25日は、引続き遺構の掘削を行い完掘する。時々雨が降るため平板測量はあきらめる。４月26日は、清掃、写真撮影、平板測量を行う。器材の大半を搬出する。４月27日は、平板測量と水準値を計測する。４月28日は、埋め戻しを行い現地調査を終了する。

写真28　調査風景

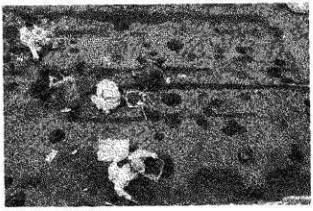


写真29　調査風景

2．検出遺構

調査区の基本土層は、第１層は表土層(家屋撤去時の攪乱土)、第２層は灰褐色土、第3層に茶褐色土で、地山(基盤層)である橙褐色砂シルトに至る。地表面から地山まで10～15cmと極めて浅かった。そのため、表土直下で地山となる部分も多かった。地表面の標高は、約8.62m、地山の標高は、約8.48mである。検出した遺構は、土坑２基、溝状遺構２基、ピット254基などである。北半はピットもまばらで、攪乱も多かったのに対し、南半はピットが密集して検出された。土坑はSK、溝状遺構はSD、ピットはPを冠し、検出順に番号を付した。

ＳＫ２

前半区で検出した。表土直下より検出した黒色土中から弥生土器片が出土した。遺構検出を行ったところ、北側がやや細長く、両側がやや丸みを帯びた輪郭で現われた。溝状遺構(SD１)と土坑(SK２)の２基の遺構が重複したものと理解したが、切り合い関係は明らかにできなかった。掘削の結果、１基の土坑(もしくは溝状遺構)となった。埋土は、３層に細分できた。上位層(第11図下図第２層、第４層)は黒褐色土で、下位層(第５層)は暗灰褐色砂シルトであった。最下層は地山Ｃ由来の砂質土に第４層、第５層や地山Ａ、Ｂブロックを密に混入した土で、小石も多い。遺物は弥生土器の破片が主として上位層から出土した。遺構の形状は舟形を呈し、主軸をN34°Eに向ける。北西側肩は直線的で急角度で掘り込まれる。南東側肩はやや膨らんでおり、掘り込み角度も緩やかである。長さ約4.2m、幅1.3～2.1m、深さは0.9～1.14mを測る。遺構の用途として考えられたのは、方形周溝墓の溝であるが、西側を12㎡試掘したところ関連する遺構は検出されなかった。遺構の埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期(山中式)と推定される。

ＳＫ１

前半区で検出した。規模は、東西約2.5m、南北2.5m以上、深さ約32cmを測る。南側は井戸で壊される。SD２との前後関係ははっきりしなかった。埋土は灰褐色砂シルトである。下位の層は暗褐色を呈するため、掘り続けたが、結果として基盤層が層をなしていることによる暗褐色を呈していたにすぎなかった(地山Ｃ)。出土遺物は陶磁器がある。盃は昭和戦前期と考えられるが、他の遺物は江戸末期であり、盃を混入と考えるか、昭和戦前期に不要品を廃棄したかのどちらかである。

ＳＤ２

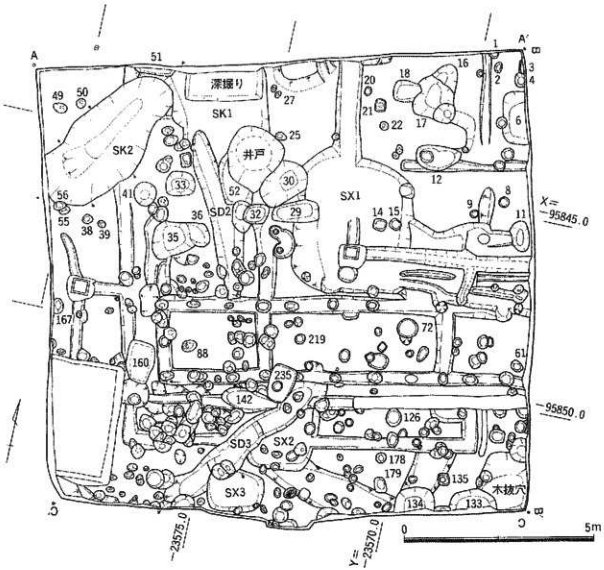
前半区で検出した。埋土は灰褐色砂シルトである。検出長約4.5m、幅約0.6～0.8m、深さ約７～17cmを測る。出土遺物は、陶磁器がある。遺構の時期は江戸末期と推定される。

ＳＤ３

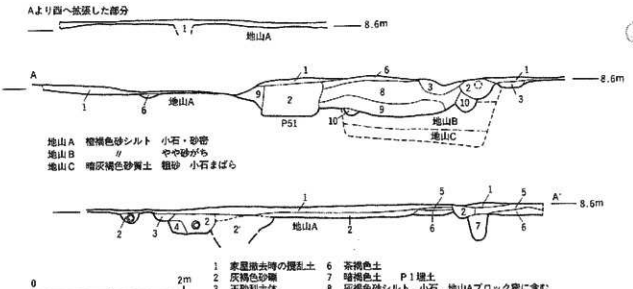
後半区で検出した。検出長約5.0m、幅約0.72m、深さ約10～35cmを測る。埋土は上位層が黒褐色土で、下位層が暗灰褐色砂シルトである。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製勾玉がある。石製勾玉は遺構検出中に出土した。遺構の時期は古代と推定される。

ピット

前半区でＰ１からP56、後半区でP61からP258まで番号を付した。規模から柱穴として掘削されたと思われるものが大半を占める。しかし、建物跡を復元するには至らなかった。Ｐ６、P52、P133、P134等は近世以降の廃棄土坑と思われる。



第９図　遺構平面図 (S－１/100)



第10図　土層図 (S＝１/50)

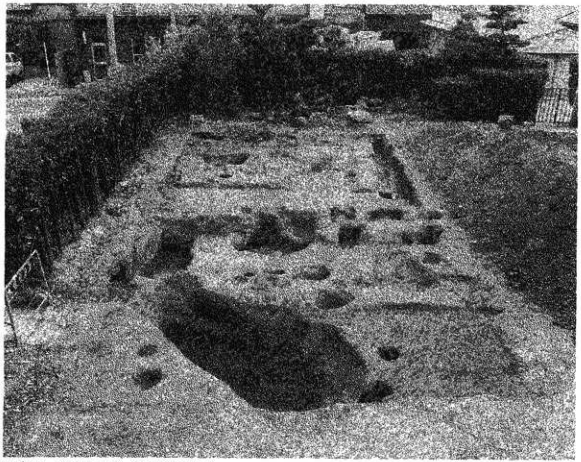


写真30　調査区全景（前半区）西から

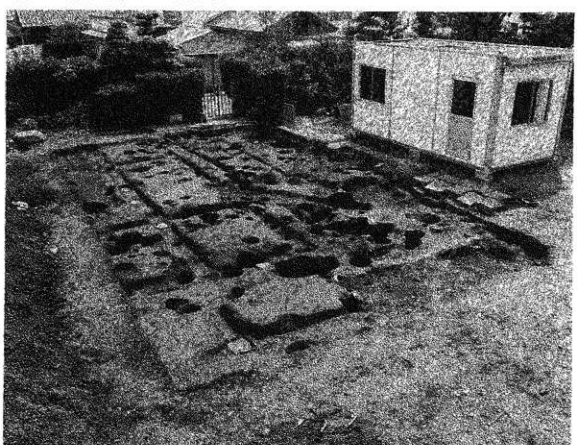
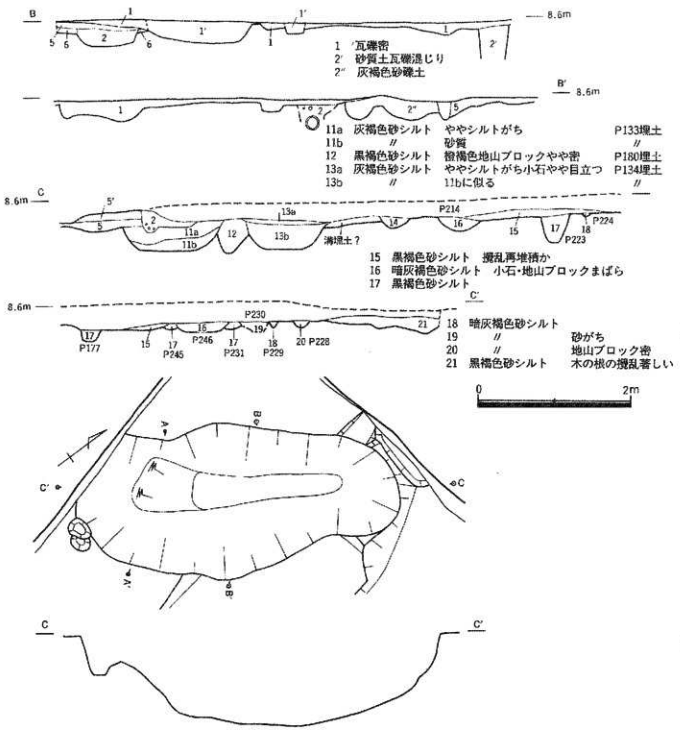


写真31　調査区全景（後半区）西から



第11図 遺構図・土層図 (S＝1/50)

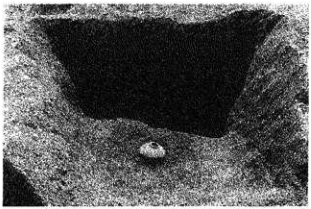


写真32　SK2　弥生土器出土状況

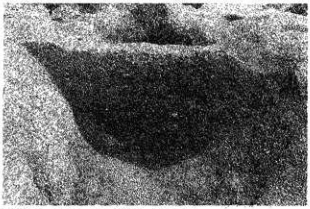


写真33　SK2　土層断面（南から）

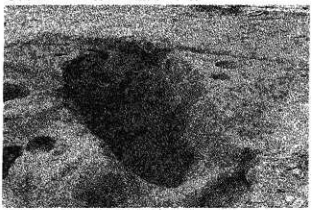


写真34　SK2　完掘状況（北から）

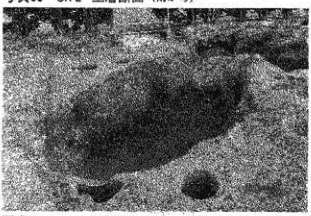


写真35　SK2　完掘状況（南東から）

写真36　P223 須恵器出土状況

写真37　P106 土師器出土状況

写真38　P133（北から）

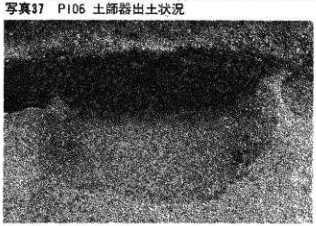
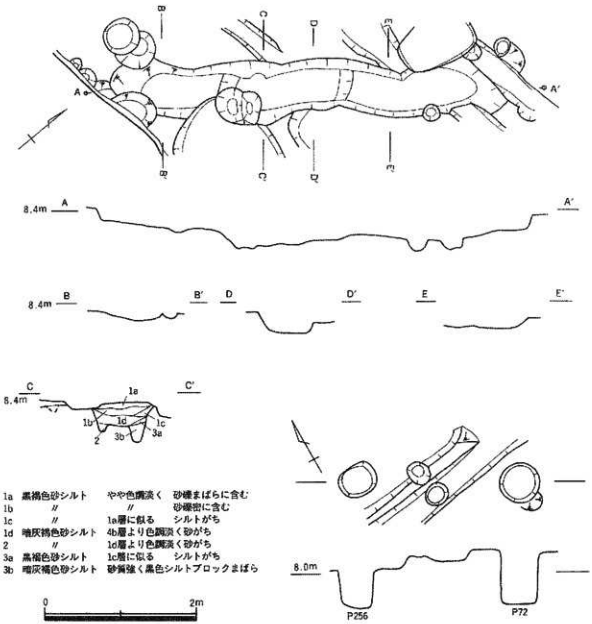


写真39　P134（北から）



第12図 遺構図・断面図 (S＝1/50)

写真40 SD3 (北から)

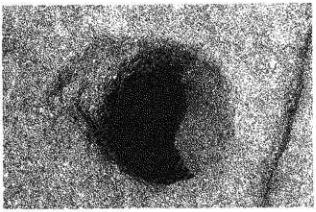
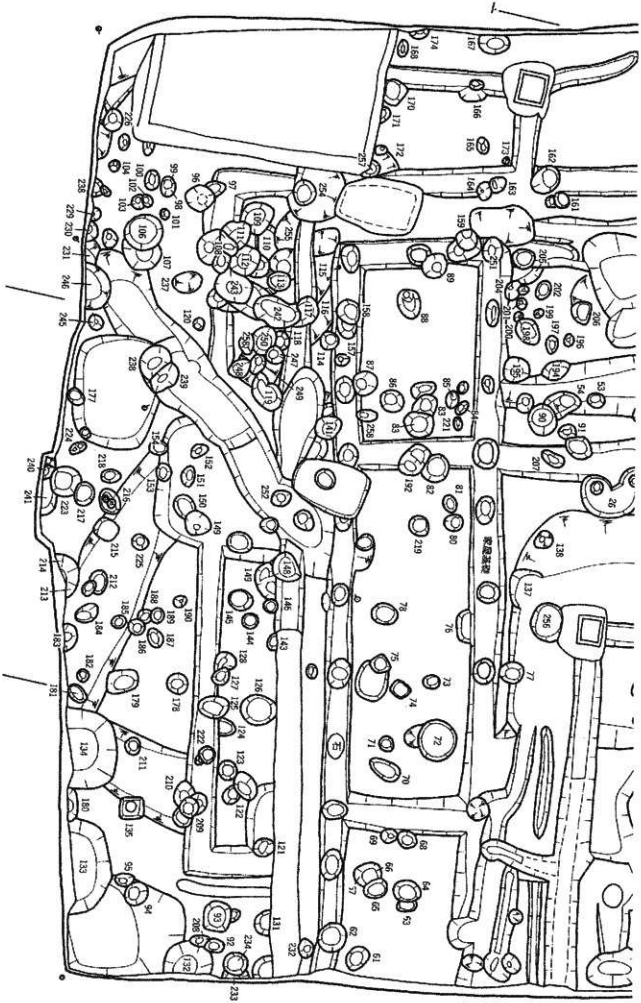


写真41 P72 (東から)



第13図　遺構図（南半分）　ピット番号は遺構一覧表に対応　S－1/50

遺構名	径	深さ	埋土	所見
P1	26×14	31	暗灰褐色土	
P2	22×28	14	黒褐色土	
P3	(10)×(34)	14	灰褐色土	炭化物密に含む
P4	26×(24)	37	黒褐色土	
P5	28×30	9	黒褐色土	
P6	140×(58)	18	茶褐色土	瓦 溜め
P7	34×32	16	黒褐色土	
P8	28×26	15	黒褐色土	土師器 須恵器
P9	22×20	15	黒褐色土	土師器
P10	18×14	21	黒褐色土	須恵器
P11	48×80	25		瓦 陶器 近代以降
P12	118×64	20	茶褐色土	
P13	38×40	15	茶褐色土	
P14	34×30	8	茶褐色土	SX 1 底で検出
P15	30×28	4	茶褐色土	SX 1 底で検出
P16	64×(54)	26	茶褐色土	
P17	100×100	38	茶褐色土	土師器 スレート 近代以降
P18	58×(74)	10	茶褐色土	
P19	82×(10)	34	灰褐色砂礫	コンクリート 近代以降
P20	18×24	9	茶褐色土	
P21	34×26	56	黒色土	柱材残る
P22	22×24	8	茶褐色土	
P23	18×16	6	茶褐色土	
P24	18×28	8	茶褐色土	
P25	30×22	11	黒褐色土	土師器 須恵器
P26北	34×(34)	33	黒色土	柱穴
P26南	62×40	34	黒色土	柱穴
P27	20×14	6	黒褐色土	
P28	14×20	7	黒褐色土	
P29	126×50	33	黒色土	土師器 磁器
P30	134×(90)	42	茶褐色土	
P31	38×38	12		
P32	62×52	27		陶器 瓦 近代以降
P33	74×64	37	黒色土	
P34	26×36	31		土師器
P35	110×92	27	茶褐色土	
P36	(50)×62	15	茶褐色土	陶器 瓦 スレート 近代以降
P37	30×28	15	茶褐色土	瓦 土師器 須恵器 近代以降
P38	28×24	52		土師器
P39	20×18	4		
P40	28×28	11	黒褐色土	
P41	60×60	37	茶褐色土	
P42	26×24	11	茶褐色土	
P43	30×40	10	茶褐色土	
P44	28×36	21	黒褐色土	須恵器
P45				欠番
P46	30×26	14	黒褐色土	溝底で検出
P47東	28×28	30	黒褐色土	土師器(東西で)
P47西	(18)×20	20	黒褐色土	
P48北	32×22	6	黒褐色土	
P48南	38×30	12	黒褐色土	
P49	38×26	16	黒褐色土	
P50	24×24	12	黒褐色土	
P51	102×(16)	27	灰褐色砂礫	陶製孔 ビール瓶 未遺 近代以降
P52	80×(140)	5	黒色土	陶磁器 焙烙
P53	20×22	21	黒褐色土	軟らかい埋土
P54	(40)×28	51	黒褐色土	土師器 土師器
P55	(16)×26	23	黒褐色土	
P56	32×22	33	黒褐色土	土師器
P61	33×35	39	黒褐色土	土師器
P62	40×42	66	黒褐色土	土師器 須恵器
P63	(12)×28	13	茶褐色土	鉄滓? 軟らかい埋土
P64	36×36	25	黒褐色土	土師器
P65	30×24	19	黒褐色土	土師器
P66・67	32×35	14	黒褐色土	土師器
P68	28×26	20	黒褐色土	
P69	20×20	14	黒褐色土	土器
P70	26×36	14	黒褐色土	

遺構名	径	深さ	埋土	所見
P71	18×20	6	黒褐色土	
P72	50×53	66	黒褐色土	土師器 須恵器
P73	26×24	23	黒褐色土	
P74	25×24	39	黒褐色土	土師器
P75	24×22	40	黒褐色土	土師器
P76	44×18	15	淡黒褐色土	軟らかい埋土
P77	29×29	42	淡黒褐色土	
P78	30×34	8	黒褐色土	
P79	25×25	59	黒褐色土	土師器
P80	24×24	13	黒褐色土	
P81	24×18	7	黒褐色土	
P82	36×30	57	黒褐色土	土師器 須恵器
P83東	35×40	78	黒褐色土	土師器 須恵器(東西で)
P83西	(26)×28	59	黒褐色土	
P84	18×14	8	黒褐色土	土師器
P85	24×18	15	黒褐色土	
P86	30×30	59	黒褐色土	土師器 須恵器
P87	30×30	39	淡灰褐色土	
P88	30×37	39	黒褐色土	
P89	36×35	59	黒褐色土	土師器
P90	36×36	52	黒褐色土	土師器 須恵器
P91	24×(18)	16	黒色土	軟かい埋土
P92	(26)×18	12	黒褐色土	須恵器
P93	40×34	11	黒褐色土	
P94	27×31	51	黒褐色土	
P95	16×22	20	黒褐色土	
P96	30×35	61	黒褐色土	木 礎
P97	(22)×22	25	黒褐色土	
P98・99	20×20	12	黒褐色土	
P100	26×20	7	黒褐色土	
P101	——		黒褐色土	土師器 未固化
P102	14×(12)	7	黒褐色土	土師器
P103	20×(14)	11	黒褐色土	
P104	14×14	8	黒褐色土	土師器
P105	22×20	4	黒褐色土	
P106	45×45	47	黒褐色土	土師器 須恵器 P107との重合不明
P107	50×(24)	13	黒褐色土	
P108	60×54	38	黒褐色土	土師器 須恵器
P109	43×43	20	黒褐色土	土師器 須恵器
P110	(26)×(46)	3	黒褐色土	
P111	(28)×32	28	黒褐色土	弥生土器 土師器 須恵器
P112	30×(32)	44	黒褐色土	土師器 須恵器 布目瓦
P113	30×26	30	黄褐色土	土師器 須恵器
P114	27×27	25	淡黒褐色土	土師器 須恵器 SK 3 底で検出
P115	——	12	淡黒褐色土	土師器 須恵器 SK 3 底で検出
P116	——	7	淡黒褐色土	SK 3 底で検出
P117	36×(22)	43	淡黒褐色土	土師器 須恵器 SK 3 底で検出
P118	(22)×(20)	15	淡黒褐色土	土師器 須恵器 SK 3 底で検出
P119	30×38	49	淡黒褐色土	土師器 SK 3 底で検出
P120	18×14	13	淡黒褐色土	SK 3 底で検出
P121	24×30	55	灰褐色土	土師器 須恵器
P122北	36×28	19	灰褐色土	土師器(南北で)
P122南	(18)×20	10	灰褐色土	
P123	26×24	16	黒褐色土	土師器
P124	24×26	5	黒褐色土	
P125	35×25	31	黒褐色土	土師器
P126	40×50	45	黒褐色土	土師器 須恵器
P127	17×20	38	黒褐色土	土師器
P128	(24)×28	18	黒褐色土	
P129	18×14	8	茶褐色土	近代以降
P130	——		灰褐色土	近代以降 未固化
P131	34×(20)	10	灰褐色土	近代以降
P132	42×(64)	17	灰褐色土	土師器 ガラス 近代以降
P133	120×(60)	32	灰褐色土	瓦 陶器 焙烙
P134	66×(62)	36	灰褐色土	瓦 陶磁器
P135	30×32	7	灰褐色土	土師器 底に石
P136			茶褐色土	滅
P137	(50)×(40)	18	灰褐色土	

第 2 表 遺構一覧表(1) 規模( )内は残存計測値 単位は cm

遺構名	径	深さ	埋土	所見
P138	22×24	10	褐色土	磁器
P139	——		褐色土	滅
P140	——		黄褐色土	近代以降 滅
P141	31×30	39	黒褐色土	
P142	150×62	24	黄褐色土	塚瓦 近代以降
P143	20×(12)	15	黒褐色土	
P144	23×24	34	黒褐色土	
P145	28×30	9	黒褐色土	
P146	19×19	53	黒褐色土	土師器
P147	30×(26)	16	黒褐色土	弥生土器 土師器 須恵器
P148	40×30	30	黒褐色土	
P149	35×35	70	黒褐色土	SX 2 底で検出
P150	(26)×28	3	黒褐色土	SX 2 底で検出
P151	28×20	10	黒褐色土	SX 2 底で検出
P152	20×18	5	黒褐色土	SX 2 底で検出
P153	24×22	17	黒褐色土	
P154	20×20	46	黒褐色土	
P155	28×(10)	10	黒褐色土	
P156	(20)×(28)	6	淡黒褐色土	
P157	18×18	14	黒褐色土	
P158	28×30	19	黒褐色土	
P159	36×48	64	黒褐色土	土師器 須恵器
P160・176	58×109	46	淡黒褐色土	土師器 須恵器 陶器 近代以降 未掘
P161	20×20	56	淡黒褐色土	土師器 須恵器
P162	26×30	61	淡黒褐色土	土師器
P163	22×22	13	茶褐色土	近代以降
P164	26×18	29	黒褐色土	
P165	22×26	6	黒褐色土	
P166	16×11	35	黒褐色土	土師器
P167	(25)×38	89	黒褐色土	土師器 未掘
P168	22×16	6	黒褐色土	
P169・170	35×(30)	33	淡黒褐色土	土師器 須恵器 鉄片
P171	20×(10)	3	淡黒褐色土	未掘
P172	14×14	10	淡黒褐色土	
P173	8×8	7	淡黒褐色土	
P174	24×(16)	8	淡黒褐色土	
P175	74×68		淡黒褐色土	鉄水銹塊形
P177	24×24	17	黒褐色土	土師器
P178	28×30	15	黒褐色土	土師器 須恵器
P179	31×44	33	黒褐色土	土師器
P180	(44)×(24)	35	黒褐色土	土師器
P181	30×22	9	淡黒褐色土	
P182	16×14	6	淡黒褐色土	
P183	34×(14)	12	黒褐色土	
P184	26×20	27	黒褐色土	弥生土器
P185	20×20	11	黒褐色土	
P186	23×27	17	淡黒褐色土	土師器 須恵器
P187	23×17	20	黒褐色土	土師器
P188	18×20	7	淡黒褐色土	須恵器
P189	20×15	31	黒褐色土	
P190	16×14	9	黒褐色土	
P191	32×(—)	30	黒褐色土	土師器
P192	42×34	69	黒褐色土	土師器 須恵器 未図化
P193	24×20	27	黒褐色土	
P194	40×(24)	12	淡黒褐色土	
P195	35×26	41	黒褐色土	土師器 須恵器
P196	18×16	12	淡黒褐色土	
P197	24×18	4	淡黒褐色土	
P198	38×30	15	淡黒褐色土	
P199	10×10	3	淡黒褐色土	
P200	10×10	2	淡黒褐色土	
P201	12×12	3	淡黒褐色土	
P202	26×20	5	淡黒褐色土	
P203	10×(10)	6	淡黒褐色土	

遺構名	径	深さ	埋土	所見
P204	28×(20)	9	淡黒褐色土	
P205	(40)×(20)	4	淡黒褐色土	土師器 須恵器
P206	30×26	19	黒褐色土	近代以降
P207	16×32	14	黒褐色土	
P208	16×28	10	黒褐色土	
P209	24×24	39	黒褐色土	土師器 須恵器
P210	(24)×32	24	黒褐色土	土師器
P211	20×20	3	黒褐色土	
P212	22×18	4	黒褐色土	
P213・214	60×(20)	18	暗灰褐色土	土師器 須恵器 陶器 近代以降
P215	30×26	5	黒褐色土	
P216	36×30		黒褐色土	レベル未測
P217	22×22	55	黒褐色土	
P218	20×24	14	黒褐色土	
P219	27×29	16	黒褐色土	
P220	——		黒褐色土	浅い窪み 未図化
P221	18×12	10	黒褐色土	
P222	24×24	16	黒褐色土	土師器
P223	35×40	36	黒褐色土	土師器 須恵器
P224	20×14	18	暗灰褐色土	
P225	20×22	9	黒褐色土	
P226	28×24	27	黒褐色土	土師器
P227	——	7	茶褐色土	未掘
P228	16×12	12	暗灰褐色土	
P229	16×(10)	7	暗灰褐色土	須恵器
P230	28×(12)	12	暗灰褐色土	
P231	(28)×(18)	6	黒褐色土	
P232	28×31	35	黒褐色土	土師器 須恵器
P233	32×(—)	15	茶褐色土	須恵器
P234	32×32	46	黒褐色土	土師器 須恵器
P235	63×100	123	茶褐色土	土師器 須恵器 陶器 柱穴 近代以降
P236			黒色土	滅
P237	40×30	4	黒色土	浅い窪み
P238	48×(34)	38	黒褐色土	土師器 SD 3 より古
P239	44×(26)	17	黒褐色土	SD 3 より古
P240	(30)×(12)	7	黒褐色土	
P241	(46)×(18)	4	黒褐色土	土師器
P242	75×40	50	黒褐色土	土師器 須恵器 SK 3 より古
P243	40×35	66	黒褐色土	土師器 須恵器
P244	——		黒褐色土	SK 3 より古 滅
P245	20×18	9	黒褐色土	
P246	60×(30)	12	暗灰褐色土	土師器 須恵器
P247	22×22	26	黒褐色土	土師器 須恵器 SK 3 底で検出
P248	32×28	42	黒褐色土	弥生土器 SK 3 底で検出
P249	(42)×54	36	黒褐色土	SK 3 底で検出
P250	(39)×(34)	23	黒褐色土	SK 3 底で検出
P251	26×30	32	黒色土	土師器
P252	25×30	19	黒色土	SD 3 底で検出
P253	25×18	39	黒色土	土師器
P254	(35)×(40)	51	黒色土	土師器 須恵器
P255	(24)×(40)	9	黒色土	土師器
P256	54×(54)	47	黒色土	土師器 須恵器
P257	26×(10)	28		土師器
P258	14×30	28		
SK 1	(160)×250	37	炭焼き跡シルト	陶磁器
SK 2	(400)×200	98		弥生土器
SK 3	(270)×(80)			土師器 須恵器
SD 2	60×(450)	17		陶磁器 土器
SD 3	350×320	32		石製勾玉 土師器 須恵器
SX 1		28		攪乱
SX 2	170×(170)	15		瓦 瓦溜め
SX 3	150×110	30		瓦 瓦溜め
SX 4	100×(250)	8		浅い窪み

第3表 遺構一覧表(2)

3．出土遺物

弥生土器、古墳時代～古代の須恵器、土師器、近世末以降の陶磁器、石製勾玉、土錘等が出土した。総量は整理箱5箱である(第14図1～24・第15図1～25・写真42～60)。

ＳＫ２(第14図1～16)

1は、弥生土器(壺形)である。口縁部及び体部上半部のほとんどを欠損する。表面はハケ調整が施される。2(写真44左)は、弥生土器(壺形)である。口縁部から体部にかけてタテハケ調整を施す。内面には指頭圧痕が残る。灰白色を呈する。3は、弥生土器(壺形)である。口縁部の小片で、口唇部に直線文、口縁部内面に櫛歯文、扇形文を施す。淺黄色を呈する。時期は高蔵式と思われる。4(写真42)は、弥生土器(壺形)である。口縁部を欠損するほかは完形である。底部に黒斑がある。明黄褐色を呈する。山中式～欠山式の時期のものである。5は弥生土器(壺形)の底部片である。底部に黒斑がある。淡黄色を呈する。6(写真44中上)は弥生土器(高坏又は器台形)の口縁部片である。口縁端部近くに2個の孔をあける。胎土に金雲母含む。7(写真45右)は弥生土器(甕形)の受け口状口縁部片である。器壁は2～5㎜と薄い。山中式でも新しい時期のものである。8(写真46左上)は弥生土器(甕形)の底部片である。外面ハケ調整、底面はナデ調整により平滑である。胎土に雲母が多く含まれる。灰色を呈する。高蔵式の時期のものである。9(写真46中上)は弥生土器(甕形)の底部片である。外面にハケ調整が施される。10(写真46右上)は弥生土器(甕形)の底部片である。砂粒多く含む。11(写真46右下)は弥生土器又は土師器(壺形)の破片である。12(写真46中下)は弥生土器又は土師器(壺形)の破片である。13は弥生土器(甕形)の脚部である。胎土に雲母を多く含む。14(写真50)は叩き石である。両端に使用痕がある。暗赤色を呈し、石質は濃飛流紋岩と思われる。15は叩き石である。両端部に使用痕がある。石質は片麻岩か。16は叩き石である。側面に使用痕がある。また平坦面も使用した感じを受ける。暗赤色を呈し、石質は濃飛流紋岩と思われる。他に弥生土器(壺形)体部片(写真43)や底部片がある。

ＳＤ３(第14図17～19)

17(写真48)は石製品(勾玉)である。濃緑色を呈し、石質は蛇紋岩と思われる。18は土師器(甕形)の底部片である。19(写真47)は土師器(甕形)である。口縁部は素縁で短く外反する。体部下半から底部を欠損する。外面はハケ調整、内面はナデ調整を施す。外面暗褐色、内面灰白を呈する。

ピット(第14図20～24・第15図1～8)

20(写真49)は土師器(甑形)である。口縁部約4分の1及び底部を欠損する。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整を施す。把手の周囲は取り付け時のハケ調整が放射状に施される。この把手と対となる位置には、剥離痕もなくまた調整がタテハケ調整であるため、この位置には付けられていなかった。把手は、本来1つしかなかったか、欠損している部分にあったかのどちらかである。P106出土。21(写真52)は弥生土器(高坏形)の脚部片である。3方にスカシ孔をあける。外面ヘラミガキ調整。時期は欠山式期と思われる。P111出土。22～24は土錘である。22(写真56中)は、全体の2分の1～3分の1程度の残存で白色砂粒や金雲母が含まれる。重さ約2.9ｇ。P54出土。23(写真56中左)は片方の端部がやや欠ける。胎土は粗く、多くの砂粒を含む。橙色を呈する。重さ約11.8ｇを量る。P69出土。24(写真56左)は23よりやや細いがよく似た形状をしている。胎土は粗く、多くの砂粒を含む。重さ約8.8ｇを量る。P254出土。1は須恵器(坏蓋)で、口縁部は8分の1程度残る。胎土は密で、焼成はやや甘い感じを受ける。灰白色を呈する。東山61号

窯期と思われる。P721出土。2は須恵器(坏身)で口縁部はわずか残るのみである。受け部近くまでヘラケズリ調整を施す。口縁部端部は上方へ強くつまみ上げる。胎土は密で、焼成良好、青灰色を呈する。東山61号窯期と思われる。P72出上。3は須恵器(高坏)の坏部片で、口縁部は約2分の1残る。内外面ヨコナデ調整を施す。外面中程に波状文を施文しようとし失敗している。外面は青灰色、内面はにぶい橙色を呈する。P223出土。4は須恵器(高坏)脚部片である。スカシが1段ないし2段入るタイプのもの。焼成は不良で、灰白色を呈する。P147出土。5(写真55右)は陶器(碗)。P134出土。6(写真55左)は磁器皿で、伊万里産。P134出土。7は弥生土器又は土師器(壺形)の底部片である。底面につく刻線は木の葉の圧痕か。P195出土。8(写真59・60)は陶製表札で、下半部分を欠失する。中は中空で、裏面は窓があけられ、窓から上方に細い切込みがある。これは、玄関のところに釘を打ち、釘に引っ掛けて使用するためであろう。裏面を除き透明釉がかかる。表面に模様及び「大日本國防□　高藏□」と焼き付けられている。文字は黒色、模様は赤色、緑色、黄色が使用されている[注1]。P51出土。P51からは他にガラス瓶が出土している。器面には「DAINIPPON BREWERY CO.LTD.」(5本出土)、「SAKURA BEER」(1本)、「キリンビール」(1本)、「NIPPON BEER KOSEN CO.LTD.」(1本)、「AKADAMA PORT WINE BOTTLED & GUHRANTEED BY KOTOBUKIYA LTD.」(1本)、「養命酒」(2本)と陽刻されている。

ＳＫ１(第15図14～20)

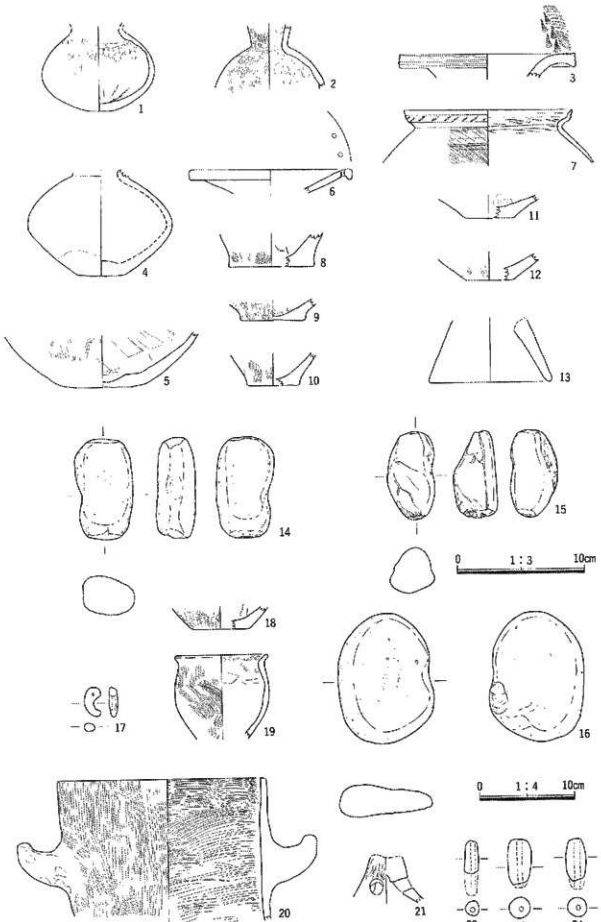
14は磁器(盃)である。見込に「山東出征□□□除隊紀念」と銘があることから、除隊記念盃で、兵士が帰国した際、家族や郷里の人達に配ったものであろう[注2]。本来金文字であったものが上絵付金泥のため、剥がれて跡のみ残る。山東出兵は第一次が1927年(昭和2年)、第二次・第三次が1928年(昭和3年)であるが、郷土部隊である第三師団の出動は第二次の時であることから1928年のものであろう。15は陶器(乗燭)は、鉄釉がかかる。底部は糸切り未調整。16は陶器(皿)で、完形品である。内面に灰釉がかかる。底部は糸切り未調整。17は陶器(皿)で、口縁部は5分の1ほど残る。内外面に灰釉がかかる。貫入が入る。底部は糸切り未調整。18は陶器(碗)である。口縁部が2分の1残る。外面に刷毛塗りされている。19は磁器(蓋)で染付手描き。20は磁器(広東碗)である。口縁部は3分の1ほど残る。伊万里産。他に摺鉢、馬の目皿等の破片や火打ち石(石質はチャート)(写真57)がある。

ＳＤ２(第15図21～25)

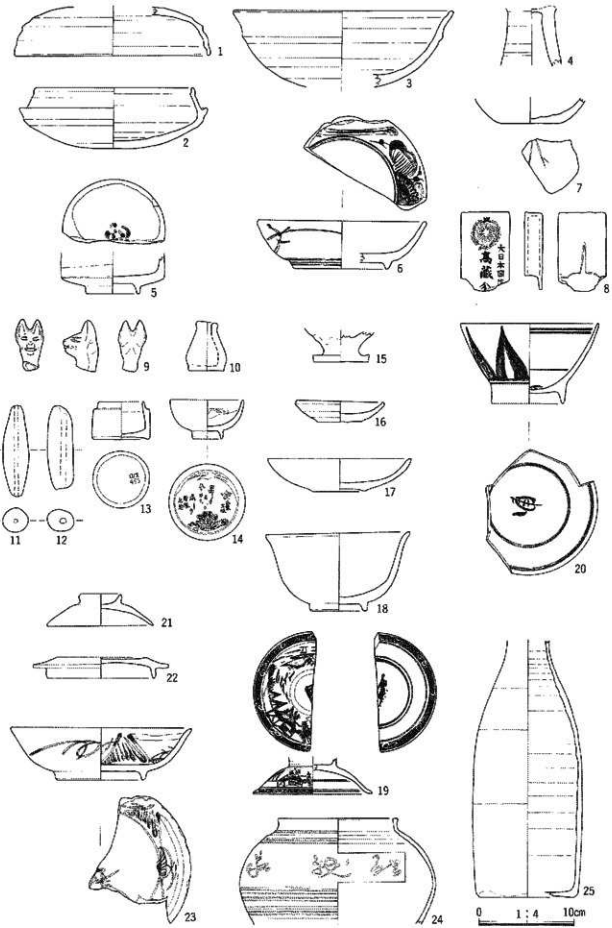
21は磁器(蓋)の破片(約2分の1残存)。22は陶器(蓋)の破片(約3分の1残存)で、外面に灰釉がかかる。23は陶器(皿)の破片(約4分の1残存)で、伊万里磁器を模倣したもの。呉須で描く。24は陶器(土瓶)の破片で、模様や文字が浮きでる。25は陶器(徳利)の破片(約2分の1残存)で、刷毛塗りが施される。他に磁器(碗)、陶器(摺鉢)、土器(焙烙)などの小片や弥生土器(壺形土器)の口縁部片(写真51)や底部片もあった。

表土・攪乱等(第15図9～13)

9は磁器(置物)で、狐の頭部である。口にものを咥えており、赤彩が施されている。10は陶器(小瓶)で底部は糸切り未調整である。底部を除き灰釉が施される。11(写真56右より2番目)は土錘で、紡錘形で長さ7cm、最大径2cm、重さ22.8g。淡黄色を呈する。12(写真56右)は土錘で、円筒形で長さ6.5cm、最大径2cm、重さ約25g。明黄褐色を呈する。13(写真58)は磁器(蓋物)である。底部にクロム系緑呉須で「岐493」とある。これは戦前、商工省の製造許可によって生産量、品目等に制限を受け、その許可認定として生産者に番号制が実施され付けられたものである[注3]。他に須恵器(甑)の把手がある。SX3出土。



第14図　遺物実測図（S＝1/4：1～16，18～21 S＝1/3：17，22～24）



第15図　遺物実測図（S＝1/4）

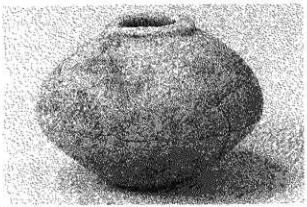


写真42　弥生土器（SK 2 出土）

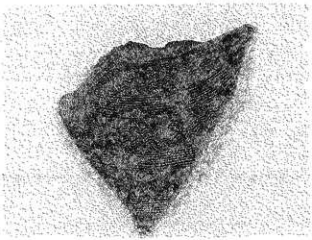


写真43　弥生土器（SK 2 出土）

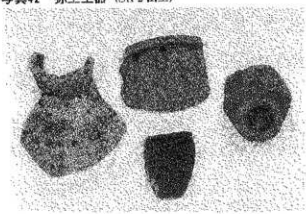


写真44　弥生土器（SK 2 出土）

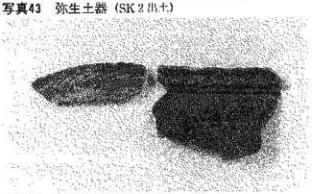


写真45　弥生土器（SK 2 出土）

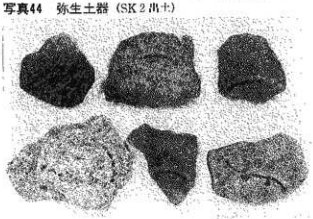


写真46　弥生土器（SK 2 出土）

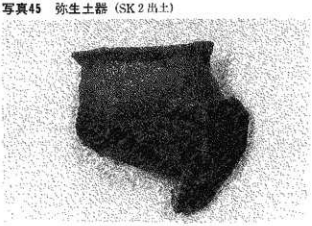


写真47　土師器（SD 3 出土）

写真48　石製品（SD 3 出土）

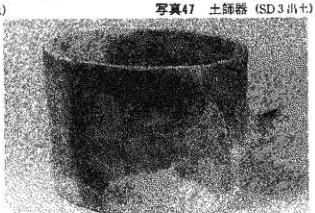


写真49　土師器（P106出土）

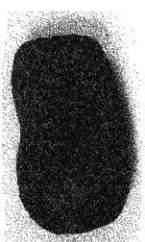


写真50　石器（SK2出土）

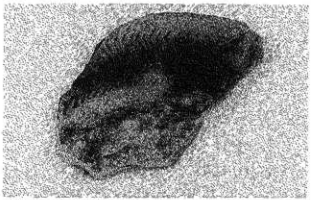


写真51　弥生土器（SK 2 出土）

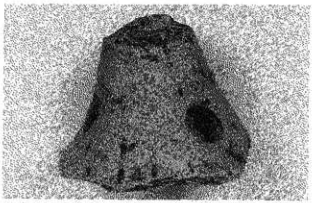


写真52　弥生土器（P111出土）

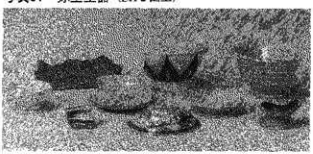


写真53　陶磁器（SK 1 出土）

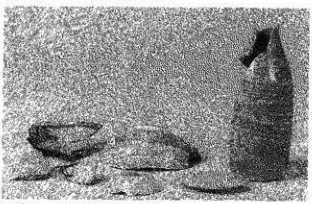


写真54　陶磁器（SD 2 出土）

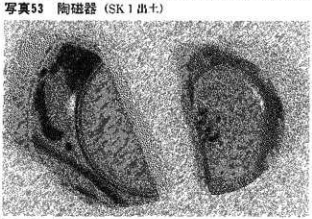


写真55　陶磁器（P134出土）

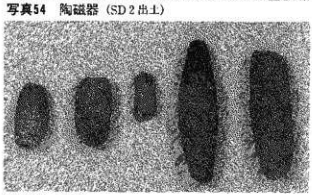


写真56　土錘

写真57　火打石（SK 1 出土）

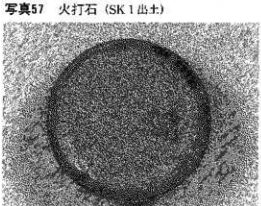


写真58　磁器（攪乱出土）

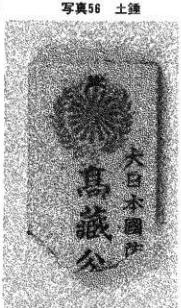


写真59　表札（P51出土）

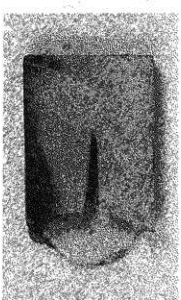


写真60　表札（裏面）

4．小　結

今回の調査成果を理解するため、当該地点の周辺で行われた調査について通覧し、今回の調査の成果、特に弥生時代について考えてみたい。

調査地周辺は、1953年の田中稔氏の踏査によりJ地点と命名された所でもある(第3図)。最近になって、3箇所の調査が行われている。以下調査地点ごとに述べる。

J地点(田中1954)の様相

田中氏は、「小さな公園のような広場の北側の道路わきに露出したV形ピットの断面を中心とするものである。貝殻は少量散布するのみで、貝塚は築かれず、20～30cmの有機土が遺物包含層となって10数mにわたって続いている。V形ピット内は寄道期の高坏形土器、甕形土器が、ピット外の包含層からは、新しい時期の弥生式土器片と共に古墳時代の須恵器、土師器などがみられる[注4]。」と述べられている。

田中氏は、V形ピットについて、深さ、幅1m内外のもので、E、H、I、J地点でみられ、E地点では、「このピットが溝状をなして細長く続いている事がわかり」[注5]と述べている。J地点のピットも断面V字形の溝状遺構であろうか。

沢上二丁目501地点(荒木1989)の様相

西南約70mに位置する(第4図18)。住居跡6基、掘立柱建物跡1基が検出され、弥生土器、土師器、須恵器、縄文土器、土錘等が出土した。住居跡の時期は、SB1、SB2は外土居式、SB4は高蔵式、SB5は高蔵式～山中式とされ、SB3、SB6は不明であった。調査者は、田中稔氏のE地点で検出された溝が環濠と推定した上で、溝埋土の土器型式が貝田町式～高蔵式と今回の出土土器と一致することから、当地点が環濠集落内に位置すると想定している[注6]。

沢上二丁目704地点(見晴1994)の様相

南南東約100mに位置する(第4図5)。台地の縁端部に立地するが、土坑、ピット、溝状遺構を検出した。土坑、ピットは弥生中期、溝は山中式期であり、形状から方形周溝墓の一部と想定される。ピットからは、壺形土器が埋め置かれた状況で出土した。土器の底部には焼成後穿孔があった[注7]。

沢上二丁目509地点(市教委1987)の様相

南約50mに位置する(第4図17)。約2㎡の試掘調査の結果、溝状遺構が検出され、埋土中から口縁部を意識的に破損させた壺形土器が出土した[注8]。

今回の調査地の様相と今後の課題

弥生時代の主な遺構は、舟形を呈した土坑1基のみであった。出土した完形に近い壺形土器(第14図4)は、山中式期から欠山式期の頃にみられるものである。その他の土器は、高蔵式と山中式の特徴をもつ。

付近の様相から明らかなことは、住居跡、溝跡等が出土し、その時期も中期後半(外土居式・高蔵式)から後期であることである。それ以上のこと、例えば沢上二丁目501地点が、果たしてE地点の溝に囲まれた環濠集落内かどうかは、少なくとも試掘地点との間に溝が通ることを明らかにしなければならないだろう。もし溝で区画されることが明らかになれば、今回の調査地点は集落の外側に該当し、遺構が希薄であったことも理解しやすくなる。また、これまで検出されている溝跡が周溝墓であるなら、集落の外側に墓域が設定されていたことになり、遺跡の構成を知る上で興味深い。

註

1　大日本国防婦人会は、1932年(昭和７年)10月に軍部の総力戦体制、国防国家体制づくりに全面的に協力するために設立されたわが国最初のファッショ的婦人団体。大政翼賛会を戦争協力に動員した。1942年(昭和17年)２月、愛国婦人会と共に大日本婦人会に統合された大政翼賛会の下部組織に組みこまれた。千野陽一「だいにほんこくぼうふじんかい」『國史大辞典第８巻』p.826，1987　調布市郷土博物館編『解説シート No.35国防婦人会・愛国婦人会』1995

2　豊橋市教育委員会編『戦中の市民生活と戦後整盾の歩み』p.19，1995

3　瑞浪陶磁資料館編『瑞浪陶磁資料館図録』p.99，1991

4　田中　稔『名古屋市熱田区高蔵遺跡における貝塚の分布』『高倉貝塚』p．5～６，1954

5　田中　稔『高蔵貝塚巨地点調査概報』『高倉貝塚』p.16，1954

6　増子康真『弥生文化のまとめ』『沢上二丁目501発掘調査報告書』p.30，1989

7　名古屋市見晴台考古資料館編『高蔵遺跡第５次調査の概要』1994

8　山田鉱一氏の教示による。

主要参考文献

伊藤秋男編1979『高蔵貝塚Ⅰ－1953年D地点第１次発掘調査－』南山大学人類学博物館

鍵谷徳三郎1908『尾張熱田高倉貝塚踏査』『東京人類学會雑誌第23巻第266號』

鍵谷徳二郎1908『尾張熱田高倉貝塚発掘』『考古界第７篇第２號』

清野謙次1925『尾張國名古屋市熱田貝塚』『日本原人の研究』岡書院

清野謙次1969『名古屋市熱田高蔵神社北方貝塚』『日本貝塚の研究』

健荒木集成館編1986『名古屋市高蔵遺跡五本松町発掘調査概要報告書』五大産業株式会社

健荒木集成館編1987『名古屋市高蔵遺跡五本松町第２，３次発掘調査概要報告書』国際興建開発コンサルタント株式会社

健荒木集成館編1989『名古屋市高蔵遺跡沢上二丁目501発掘調査報告書』川島商事株式会社

健荒木集成館編1991『名古屋市高蔵遺跡五本松町第４，５，６，７次発掘調査概要報告書』株式会社ユニオン

酒詰仲男1967『貝塚に学ぶ』学生社

佐藤亀一1918『尾張國熱田の貝塚より得たる日本石器時代人骨に就いて』『人類學會雑誌第33巻第11號』

杉山寿榮男1930『愛知県熱田貝塚出土の彌生式土器』『史前學雑誌第２巻第２號：史前學會

澄田正一1955『愛知県名古屋市高蔵貝塚』『日本考古学年報４』

高蔵遺跡(花町地区)調査会編1994『高蔵遺跡(花町地区)発掘調査報告書』高蔵遺跡(花町地区)調査会

高橋健自1908『熱田貝塚の被見につきて』『考古界第７篇第１號』

田中稔編1954『高倉貝塚』豊橋市弧郷遺跡調査会

鳥居龍蔵1925『熱田貝塚より發見せる馬骨』『有史以前の日本』

中山英司1956『愛知県名古屋市熱田区高蔵貝塚』『日本考古学年報６』

名古屋市見晴台考古資料館編1982『熱田区高蔵町　高蔵遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1983『熱田区夜寒町所在高蔵遺跡発掘調査概要報告書』

『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1988『熱田区五本松町高蔵遺跡第３次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1990『高蔵遺跡－第４次調査の概要－』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1994『高蔵遺跡第５次調査の概要』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1995『高蔵遺跡第６次調査の概要』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1995『石神遺跡玉ノ井遺跡高蔵遺跡(第７次)発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

楠崎彰一1955『名古屋市熱田区高蔵第１號墳の調査』『名古屋大学文学部研究論集Ⅹ１　史学４』名古屋大学文学部

南山大学人類学博物館編1982『高蔵貝塚－春日井持地区発掘調査報告書：高蔵遺跡調査会

南山大学人類学博物館編1985『高蔵貝塚Ⅱ－1956年D地点第２次発掘調査』南山大学人類学博物館

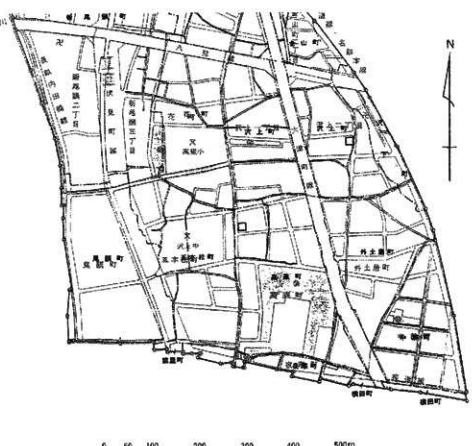
南山大学人類学博物館編1988『高蔵貝塚Ⅲ－1985年度夜寒地区発掘調査－』南山大学人類学博物館

長谷部言人1925『石器時代の馬に關して』『人類學會雑誌第40巻第４號』

長谷部言人1940『熱田貝塚からの馬の左掌骨』『人類學會雑誌第55巻第５號』

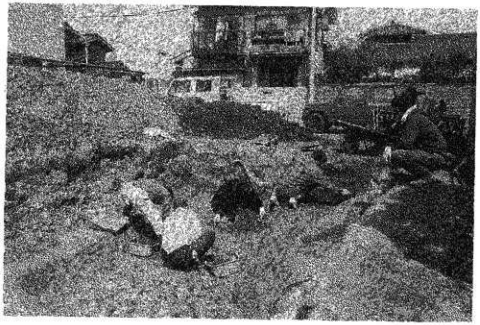
夜寒町遺跡調査会編1988『高蔵(夜寒町102番地)遺跡調査報告』『古代人49』名古屋考古学会

写真61　高蔵遺跡周辺の航空写真　　米軍撮影(1950. 4. 13)



第18図　区画整理前後の状況　濃い線は整理前の道・町境　　名古屋市計画局『戦災復興誌』より

桜台高校遺跡(第２次)



例　言

1．本編は、桜台高校遺跡の第２次発掘調査の報告である。
2．調査地点は、名古屋市南区菊町28－２である。
3．調査期間は、平成７年３月９日から同年３月30日までである。
4．調査面積は、約120m²である。
5．調査は、個人住宅建築に伴い、国庫補助金による名古屋市教育委員会の事業として実施した。調整事務は教育委員会文化財課学芸員　竹内宰哲、現場調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員　松村冬樹、服部智也、水野裕之が担当した。
6．調査にあたり依頼者である牧野武夫氏の御協力を得た。また調査及び遺構遺物の整理作業には大村実・中谷知由・株根秀之(中京大学学生)の協力を得た。
7．排土工事は、大崎陽藝有限会社が工事請負で実施した。
8．基準点測量等は、松岡測量設計株式会社に委託した。
9．出土遺物、記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
10．本編の編集、執筆は水野が行った。

第２図　周辺の遺跡

目　次

Ⅰ　遺跡の概要 …… 1
Ⅱ　調査の経過 …… 1
Ⅲ　遺構と遺物 …… 2
Ⅳ　まとめ …… 5

第１図　遺跡位置（国土地理院５万分の１　名古屋南部）

第３図　発掘調査位置

Ⅰ　遺跡の概要

当遺跡は、熱田層からなる標高14mほどの台地上に立地し、南北約800m、東西約300mの規模で、谷によって島状に孤立した地形に位置する。これまで弥生時代から平安時代の遺跡として知られていて、台地南端の見晴台遺跡など、弥生時代から中世にかけての遺跡が濃密に分布するうちのひとつである。

当遺跡は、昭和26年に北村敏夫氏などによって市立桜台高校校庭で弥生時代後期とされる住居跡や、古墳時代、奈良時代の須恵器が検出されている。また、昭和29年には校庭の西側に校舎を新築する際、平安時代の土馬(陶馬)2個体が発見されている。

市教委による発掘調査は、昭和53年7月に同高校の運動場改修工事の際、遺物等が出土し、工事を中断して緊急調査を行った(1次調査)。

その結果、古墳時代以降の竪穴住居跡を含む3軒の住居跡、溝2本、土坑2基が検出された。土坑は、2基とも平面形が長方形状で1.2×0.7m、深さ0.3mであった。東側の土坑からは、木片(鏡れん)の付着した平安時代末頃の和鏡(「洲浜菊花双雀鏡」)が、西側の土坑からは、砥石と鉄製短刀がいずれも土坑の西北隅で検出されている。これらは、土坑墓の可能性が高い。

Ⅱ　調査の経過

今回の発掘調査地点は、「名古屋市遺跡分布図(南区)」(第2図)では、六本松遺跡、元桜田町遺跡、桜台高校遺跡、楠町遺跡に囲まれた地点であり、推定遺跡範囲の外側にあたるが、平成7年3月9日、文化財課による試掘の結果、良好な包含層や土器片が確認されたため、その日から引き続いて発掘調査にはいることになった。

今回の調査位置は桜台高校遺跡範囲に最も近い

写真1　調査風景

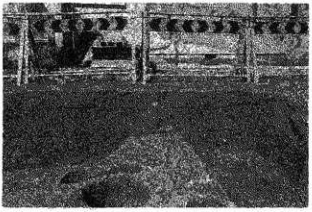


写真2　土層断面

写真3　検出遺構

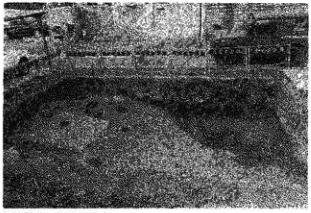


写真4　検出遺構

ことから、当遺跡として調査した。

III　遺構と遺物

(1)　土　　層

調査区内の基本土層は、地表から20cmが表土層、さらに30cmが均質な茶灰色土層(包含層)、これより下は基盤の黄橙色土(熟田層)または、遺構埋土(暗灰色土)である。

(2)　遺　　構

遺構は、ほとんどが熟田層面まで下げないと確認できなかった。

重複していると思われた遺構の切り合う部分は、ほぼ同一の埋土であったことから、新旧関係があるかどうかの確認はほとんどできなかった。

検出遺構は、底面が平坦で浅い溝状の大型遺構(SK03)、長方形または、平行四辺形を呈する竪穴状遺構(SK07、08、11)、楕円形、不整形の土坑(SK02、04、14)、直線または曲線の溝状遺構(SK01、10)、大きな井戸状の掘り込み(SK03溝部、未完掘)の他、径20～40cmのピット(P 1 ～51)がある。

遺構平面図中のSK05、12は、SK03の一部として扱った。SK03内の遺構(SK08、10、11)は、平面的な検出では切りあいが不明であったが、SK08は調査区南壁の土層断面(BB'間)では、SK08埋土の上にSK03埋土がのっている状況である。

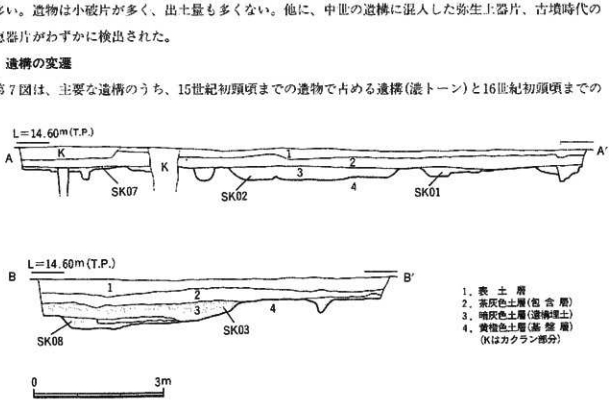
(3)　遺　　物

茶灰色土層(包含層)からは、15世紀頃の陶器片などがわずかに検出された。

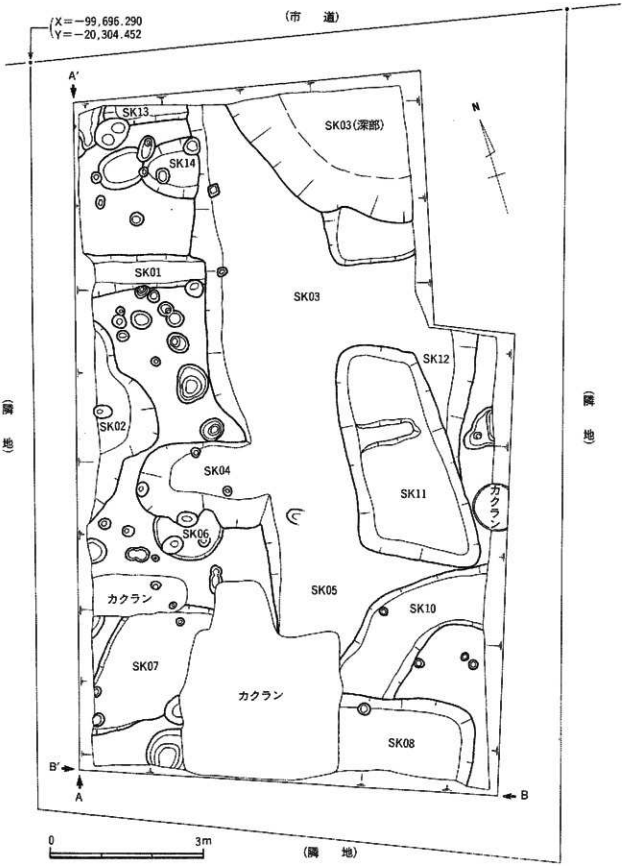
遺構から出土した主要な遺物(瀬戸美濃、常滑の陶器など)の時期は、15世紀～16世紀初頭頃までのものが多い。遺物は小破片が多く、出土量も多くない。他に、中世の遺構に混入した弥生土器片、古墳時代の須恵器片がわずかに検出された。

(4)　遺構の変遷

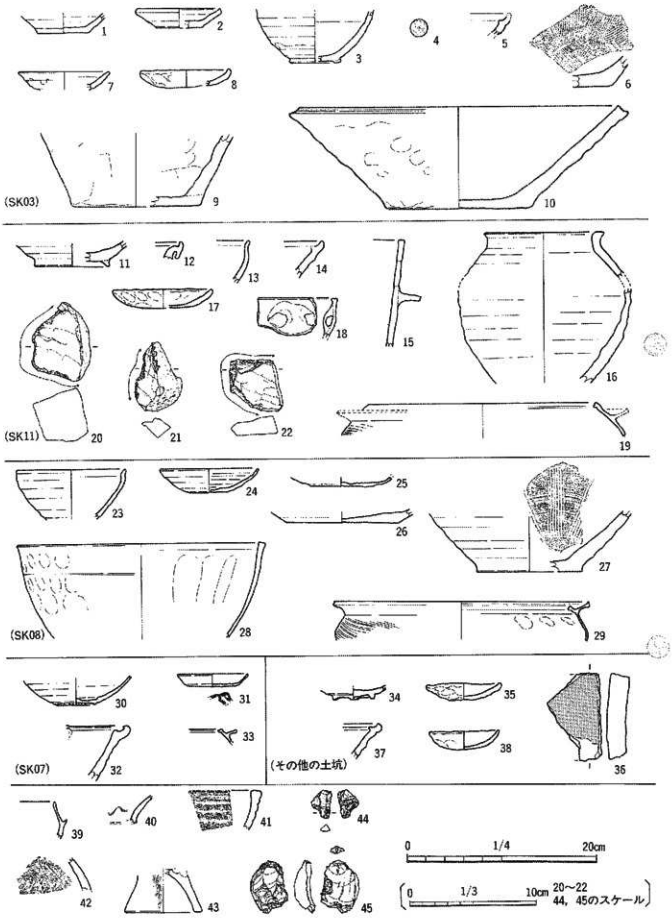
第7図は、主要な遺構のうち、15世紀初頭頃までの遺物で占める遺構(濃トーン)と16世紀初頭頃までの



第4図　調査区土層断面図（平面図のAA'間、BB'間）



第5図　調査区平面図（方位は座標北である）



(中世以前の遺物)

第6図　主要出土遺物

遺物が占める遺構(淡トーン)を示したものである。はじめは、東西方向に長軸を示す小規模な遺構があったようである。

建物跡の推定は、形状、時期とも確証はないが、ピットからのわずかな出土遺物は、15世紀頃までのものであった。

〈挿図掲載遺物一覧〉 (単位は cm)

番号	出土場所	種別	器種	口径	器高	底径	備考
1	SK03	尾張系山茶碗	碗			(5.3)	内面に重ねあとについて、文字(?)あり
2	〃	〃	〃				
3	〃	瀬戸東濃陶器	小皿	(8.6)	2.0		
4	〃	東濃系山茶碗	天目茶碗			(5.5)	鉄釉
5	〃	瀬戸系東濃陶器	陶丸				直径1.9cm
6	〃	〃	〃				〃
7	〃	〃	〃				〃
8	〃	〃	〃				〃
9	〃	〃	〃				〃
10	〃	〃	〃				〃
11	SK11	尾張系山茶碗	碗			(7.7)	
12	〃	常滑陶器	甕				灰釉
13	〃	瀬戸東濃陶器	天目茶碗				鉄釉
14	〃	〃	〃				〃
15	〃	〃	〃				〃
16	〃	瀬戸東濃陶器	〃				鉄釉
17	〃	〃	〃				〃
18	〃	〃	〃				〃
19	〃	〃	〃				〃
20	〃	〃	〃				〃
21	〃	〃	〃				〃
22	〃	〃	〃				〃
23	SK06	瀬戸東濃陶器	天目茶碗	(11.3)			鉄釉
24	〃	東濃系山茶碗	碗	(10.2)	(2.5)	(4.6)	
25	〃	〃	〃			(6.4)	ロクロ(回転糸切痕)
26	〃	瀬戸東濃陶器	鉢			(11.7)	内面に灰釉
27	〃	〃	〃			(11.6)	鉄釉
28	〃	〃	〃	(24.8)			(脚をつけた位置の記憶か)
29	〃	〃	〃	(22.8)			
30	SK07	東濃系山茶碗	碗			(4.0)	
31	〃	〃	小皿	(7.3)	1.3	(4.8)	外面底に墨書(不明)
32	〃	尾張系山茶碗	片口鉢				
33	〃	〃	〃				
34	P2	中国製白磁	碗			(4.4)	高台の4ヶ所に荒目の砂り込
35	SK04	〃	〃	(7.7)	1.5		赤ロクロ
36	〃	石製品	砥石				砂岩(研質)
37	SK09	瀬戸東濃陶器	擂鉢				鉄釉
38	SK13	土師器	皿	(7.2)	1.9		赤ロクロ
39	SK11	須恵器	杯身				
40	SK04	弥生土器	底部				後期前半(山中期)
41	SK06	〃	台付?鉢				中期後半(高蔵期)
42	SK10	〃	壺?				〃
43	SK08	〃	台付壺			(7.4)	〃
44	〃	石器	石錘				「下長石」
45	P1	〃	剥片				チャート

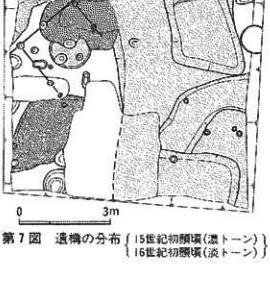
〈土坑一覧〉 (単位は m、最大値)

遺構番号	平面形	断面	長	短	深	出土遺物・時期など
SK01	楕円	逆台形	2.1以上	0.85	0.17	山茶碗(14C末~15C前)、土師器(ロクロ)
〃 02	不整形	皿状	4.30以上		0.33	須恵器、瓦質鍋、白磁碗、土師器(ロクロ)
〃 03	楕円	方形	10.50以上	4.2	0.29	(遺物参照) 14~16C中
〃 04	楕円形		2.40以上	1.7	0.31	土師器小皿2ヶ、ロクロ、須恵器、小皿(C2~3C前)
〃 05	楕円形一部					土師器甕
〃 06	円形	皿状	1.35		0.06	瓦器
〃 07	不整楕円	方形	2.3	1.70以上	0.13	(遺物参照) 14C末~15C中頃
〃 08	楕円形?	皿状	2.75以上	1.50以上	0.28	(遺物参照) 15~16C前 (SK11同様の場合)
〃 09a	不明					瓦器(16C前)、灰釉甲碗(15C)、瓦質鍋
〃 10	楕円	皿状	3.50以上	1.3	0.1	瓦器
〃 11	平行四辺形	皿状	4.7	2.3	0.27	(遺物参照) 15~16C前
〃 12	SK03の一部					瓦器
〃 13	不明		1.05以上		0.09	山茶碗、小皿(14C末~15C前)、土師器(ロクロ)
〃 14	楕円形	皿状	1.25以上	1.2	0.16	山茶碗

Ⅳ まとめ

今回の調査以前に行われたこれまでの発掘調査成果では、調査区から100mあまり離れた地点の発掘調査(桜台高校校内や楠町のマンション用地)によって、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構や遺物が検出されていた。このため当地点にも該期の遺構、遺物の検出が予想されたが、結果は中世の包含層、遺構、遺物の成果を得た。

調査地点では、中世の居住地の一部を調査したと思われるが、地点によって遺跡の主たる時期や内容、性格が違ってくることをあらためて示すものであった。また、現在の遺跡範囲外側(遺跡北東部)にも良好な埋蔵文化財が広がっているところがあることをあきらかにした。



第7図 遺構の分布 { 15世紀初頭頃(濃トーン) / 16世紀初頭頃(淡トーン) }

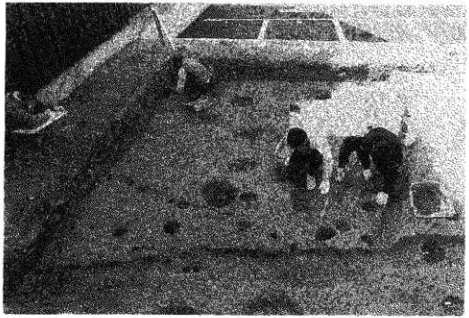
No.	遺跡名称	時代
1	中根北城	
2	中根中城	
3	中根南城	
4	山崎城	天正6(1586)廃
5	砦左衛門屋敷	
6	砦跡・歴史館付近	
7	砦歴教西城	天正年間廃
8	鳥居城	長享2(1488)
9	大地南城	
10	丸根城	
11	桜中村城	
12	戸部一色城	
13	戸部城・弾刀屋敷	戸部城は天正年間
14	寺部城	天文22(1553)廃
15	市場城	永禄7(1564)廃
16	星崎城	天正10(1582)
17	庄子城(庄子砦)	天文22(1553)廃

第8図　桜台高校遺跡(丸印)と中世城館跡の分布
(2万分の1)

〈参考文献〉

・吉田富夫、三渡俊一郎他　1969　『南区の原始・古代遺跡』　三渡俊一郎
・名古屋市教育委員会　1979　『瑞穂遺跡・桜台高校遺跡発掘調査概要報告書』
・名古屋市見晴台考古資料館　1982　『館蔵品図録III』

桜小学校遺跡



例　言

1．本編は名古屋市南区桜台二丁目1501－2に所在する、桜小学校遺跡の発掘調査の報告である。対象面積は約115㎡であったが、うち遺構の遺存した50㎡を発掘した。

2．発掘調査は平成7年2月13日から平成7年2月21日まで行なった。

3．調査は名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴古考古資料館学芸員松村冬樹・水野裕之・服部哲也が担当した。

4．調査は個人住宅建築に伴うものであり、調査依頼者である山本研朗・山本玲子氏の御協力を得た。

5．調査および、遺構・遺物の整理作業にあたっては、大村実・中谷知由(中京大学学生)、近藤和子の協力を得た。

6．出土遺物および記録類は、名古屋市見晴古考古資料館が保管している。

7．本編の執筆は水野の協力を得て服部が行なった。

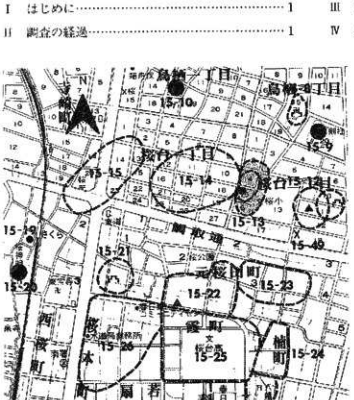
目　次

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　調査の経過……1

Ⅲ　調査の内容……4

Ⅳ　おわりに……6



第1図　桜小学校遺跡と周辺の遺跡

遺跡No.	遺跡名
15-8	新屋敷鳥栖城跡
15-9	鳥栖八幡社古墳
15-10	鳥栖神明社古墳
15-11	桜大道掛北城跡
15-12	東郷池貝塚
15-13	桜小学校遺跡
15-14	桜台町遺跡
15-15	桜本町一丁目遺跡
15-19	町屋古墳
15-20	桜神明社古墳
15-21	桜中村城跡
15-22	六本松遺跡
15-23	元桜田町遺跡
15-24	鶴町遺跡
15-25	桜台高校遺跡
15-26	桜本町遺跡
15-27	弥生町遺跡
15-28	桜田貝塚、貝塚町遺跡
15-29	若草野町遺跡
15-30	扇田町遺跡
15-31	桜本町低地遺跡
15-32	見晴台遺跡
15-33	笠寺観音遺跡
15-49	桜経塚

Ⅰ　はじめに

1 位置と環境　桜小学校遺跡の所在する南区は市域の最も南に位置する。調査地点へは最寄りの名鉄桜駅(名鉄本線)から東へ約500ｍの距離である。地形的には、名古屋台地が島状に分断された通称笠寺台地に立地し、標高は約10～13ｍである。

笠寺台地上には見晴台遺跡をはじめとした、おもに弥生時代から古墳時代にかけての遺跡(これらの遺跡は桜小学校遺跡・桜台町遺跡・桜台高校遺跡・桜本町1丁目遺跡・桜本町遺跡・桜本町低地遺跡・桜田貝塚・元桜田町遺跡など名称もよく似た遺跡が多く注意を要す)が目白押しである。その中で、本遺跡と東郷梅貝塚・桜台町遺跡・桜本町1丁目遺跡は、現在廃取通になっている谷地形より北側に位置している。また遺跡地の東には島栖八剣社古墳、西に桜神明社古墳、北に島栖神明社古墳が位置しており興味深い。

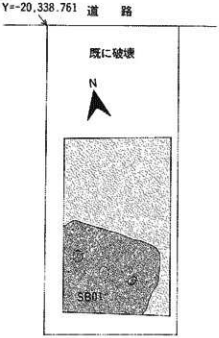
第２図　調査地点

2 遺跡の概要　桜小学校遺跡の発見は、昭和11～13年頃北村榮夫氏の調査に始る。この時の調査では幅２ｍ・深さ１ｍの溝状遺構が見つかり、弥生時代後期の土器が出土している。しかしこれ以降は、遺跡地周辺で土器や石器がわずかに採集されているのみであり、正式な調査は行なわれていない。従って、遺跡の具体的な内容は不明のまま現在に至っている。

Ⅱ　調査の経過

1 調査に至る経過　遺跡地内に住宅建築を予定した山本研朗・山本玲子氏より依頼をうけ、敷地面積約115㎡を対象に調査を行なうこととした。しかし、事前の現地調査により、そのうちの半分以上は、既に破壊されて遺構が遺存しないことが明らかになり、実際の調査は約50㎡となった。

調査方法は、発生土の積み置きスペースを確保する関係で、南半・北半の折り返しての調査とし、南半より表土除去以下の工程を進めた。



第３図　調査区図　(１：200)

2日誌抄

2月10日(金)　排土工事は大崎園芸(有)、基準点測量業務委託は松岡測量設計㈱と契約。各業者と現地で打ち合せ。

2月13日(月)　調査区を設定後、南半部分より表土掘削開始。表土以下は地山もしくは遺構の埋土であり、包含層は遺存しなかった。引続き遺構検出。竪穴状の大きな落込み検出。SK01とする。

2月14日(火)　遺構掘削。SK01は竪穴住居跡と判明。炉跡、主柱穴、壁溝等が遺存する。断面等の部分写真・実測につづき、基本平面図、断面図作成。

2月15日(水)　すべての遺構を完掘。平面図・断面図完成。清掃後、遺構の完掘状況、発掘区の全景写真撮影。SK01炉跡の断ち割り。土地所有者の山本研朗、山本玲子氏見学。

2月16日(木)　南半部分埋め戻し。北半部分表土除去。北東隅は攪乱されていることが判明。引続き遺構検出。

2月17日(金)　北半部分遺構検出。ピットと浅い溝のみで、住居跡は無し。遺構掘削。

2月20日(月)　遺構掘削完了。基本平面図、断面図作成。清掃後、遺構の完掘状況、全景写真撮影。基準点測量。

2月21日(火)　埋め戻し。バリケード撤去。発掘調査完了。

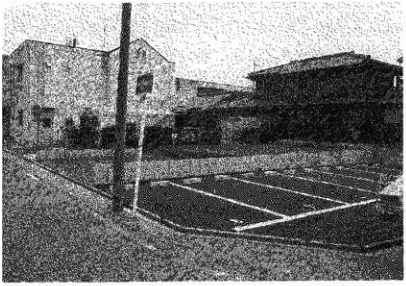


写真1　調査前

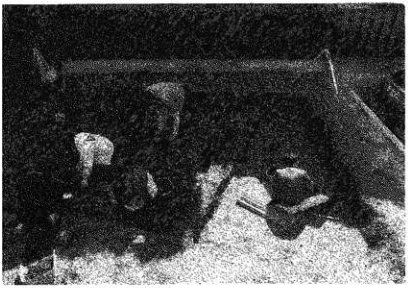


写真2　調査風景　(南半)

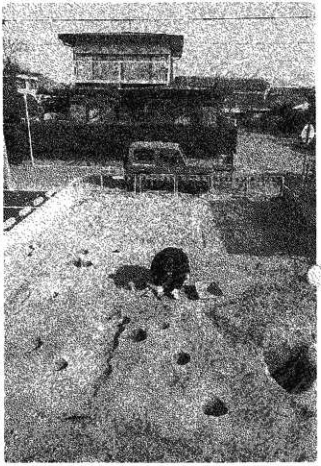
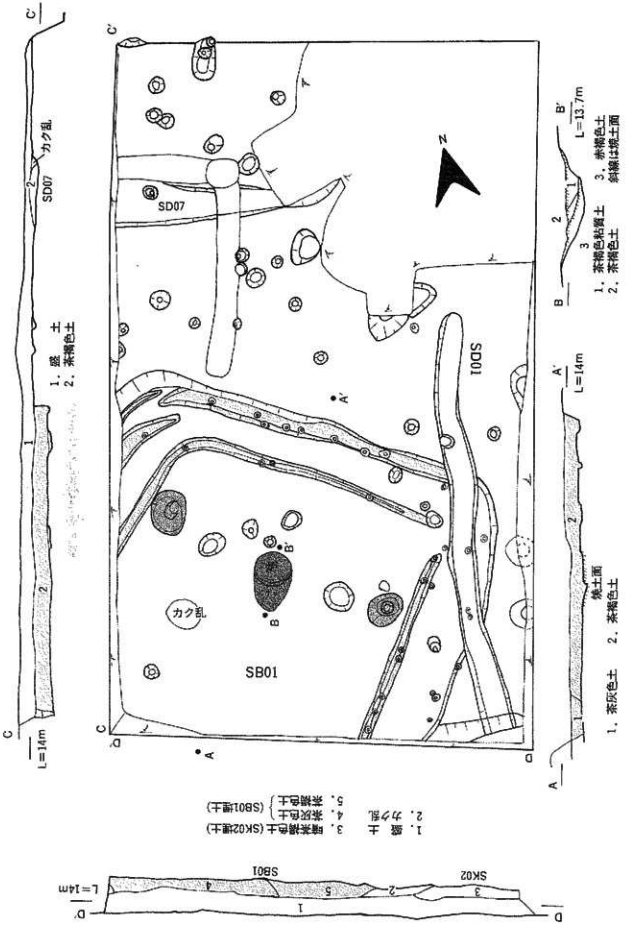


写真3　調査風景　(北半)



第4図　遺構平面図及び断面図　(1：50)

Ⅲ　調査の内容

今回検出の遺構は、住居跡１棟・溝２本・その他大小の穴約30基である。そのうちの住居跡は、一部調査区外であったが良好に遺存していた。

出土遺物も量的には少なく、ほとんどが破片であり、コンテナケースで２箱程である。その多くはやはり住居跡の埋土中であり、以下、住居跡とその出土遺物について述べる。

竪穴住居跡

形　隅丸の方形プランで、規模は一辺約5.5ｍを測る。竪穴状の掘り込みの深さは、最も残りが良かったところで、約20cmを測った。床面にはほぼフラットであったが、やや北側が高く、その最大比高差は約10cmであった。なお、床面上の貼床は認められなかった。

柱穴　主柱穴は本来は４本と推定されたが、そのうちの２本を検出した。２本の柱間は約３ｍである。北東柱穴は直径約40cm・深さ約50cm、北西柱穴は直径約50cm・深さ約25cmを測り、北東柱穴が深く穿たれていた。

炉　柱間のほぼ中央に炉跡を検出した。従って、住居跡全体の中では中央に炉があるのではなく、北に偏った位置に作られていたことになる。炉は南北軸約90cm・東西軸約50cmの楕円形に焼けた範囲と考えられたが、焼土面は床面とほぼ同じ高さに一面、約８cm下に一面の２面あった。これは使用中、灰を掻き出すなどによって、自然と窪んでいった炉底を埋めて補修し、再度使用した結果と考えられた。

壁溝　床面上には、壁に沿ってと、壁から約70cm離れた地点との２重に溝がめぐっていた。溝内には小さなピットが穿たれており、排水の機能より、溝内に板等を立てかけた可能性が考えられよう。

埋土　住居跡内に堆積した土は、均質でやや砂っぽい茶褐色土一層であり、炭化物と弥生土器片を僅かに含んだ。

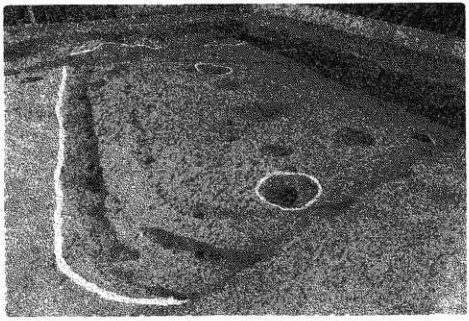


写真４
SB01 完掘状況　（西より）

写真 5
SB01 完掘状況 （北より）

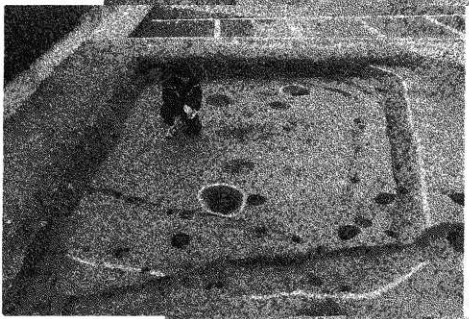


写真 6
SB01 完掘状況 （東より）

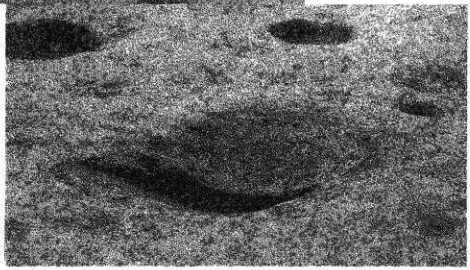


写真 7
炉 断面

遺物　床面直上の遺物は、石鏃１点のみであり、他は埋土中からの出土である。従って、住居の廃絶に伴って、土器などの道具類を住居内に廃棄していった様子はない。

床面出土の石鏃は、下呂石製の無茎鏃で、長さ２cmほどの小型品である。

弥生土器は、ほとんどが破片であり、形の推定できるものは、甕の口縁、脚部、壷などごく僅かである。これらはすべて、弥生時代後期の土器片であり、この住居の廃絶の時期も弥生時代後期と推定されよう。

写真９　石鏃出土状況

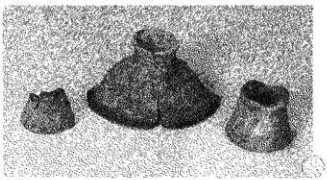
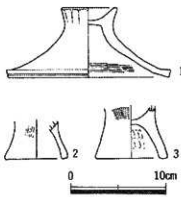
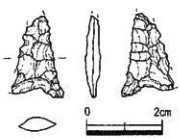


写真８　SB01 出土土器



第５図　SB01出土土器



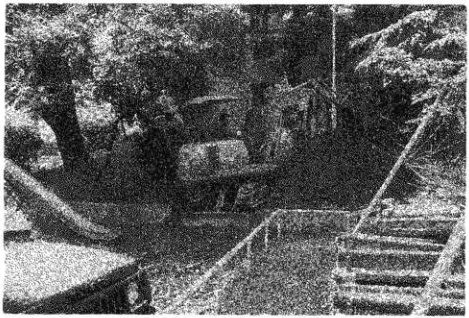
第６図　SB01床面出土石鏃

Ⅳ　おわりに

今回の調査は小規模ながら、桜小学校遺跡での戦後初めての調査(本格的な発掘調査は今回が初めと言ってよいであろう)であり、その点だけをとっても画期的なことであった。さらには良好な弥生時代後期の住居跡１棟を検出できたことで、当遺跡が弥生時代終わり頃の集落跡を中心とする遺跡であろうことを明らかにした。

今後は、当集落の規模や消長、そして周辺の同時代の集落との関係を解明していくことが課題となろう。

那古野山古墳（墳丘確認）



雪の中の調査

例　言

1．本編は名古屋市中区大須二丁目1903に所在する、那古野山古墳墳丘確認調査の報告である。対象面積は約11㎡であった。

2．調査は平成7年1月30日から平成7年2月2日までの4日間行なった。

3．調査は名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員水野裕之・服部哲也が担当した。

4．調査は那古野山公園の整備事業に伴うものであり、名古屋市農政緑地局の協力を得た。

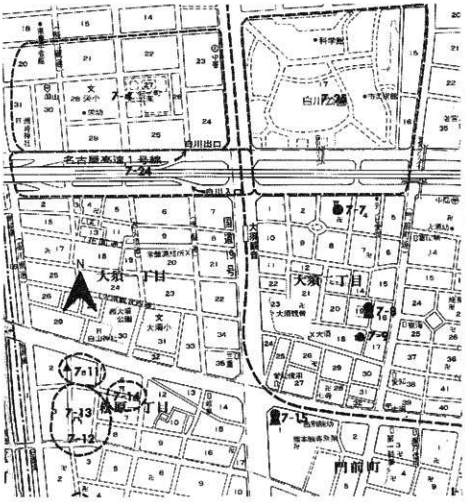
5．調査および、遺構・遺物の整理作業にあたっては、近藤和子の協力を得た。また、伊藤厚史氏には数々の御教示をいただいた。

6．出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

7．本編の執筆は服部が行なった。

目　次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　調査の経過……1
Ⅲ　調査の内容……3
Ⅳ　出土遺物……5
Ⅴ　おわりに……8



No.	遺　跡　名
7-4	竪三蔵通遺跡
7-7	日出神社古墳
7-8	那古野山古墳
7-9	浅間神社古墳
7-11	岩井通貝塚
7-12	旅籠町遺跡
7-13	日置城跡
7-14	西脇町遺跡
7-15	大須二子山古墳
7-24	旧紫川遺跡
7-25	白川公園遺跡

第1図　那古野山古墳(7-8)と周辺の遺跡

Ⅰ　はじめに

1 位置と環境　那古野山古墳は名古屋市域のほぼ中央に位置する。名古屋駅からは南東へ約2kmの距離にある。地形的には名古屋台地のほぼ真ん中に立地し、標高は約11mである。

2 那古野山古墳の概要　那古野山古墳の周辺には、北に日出神社古墳、南に大須二子山古墳・浅間神社古墳が位置し、総称して大須古墳群と呼ばれている。

現況は円墳状を呈しているが、昭和7年(1932)に作成された『愛知県史跡名勝天然紀念物』の「愛知県内古墳知名表」には「円形モト鰐形ナリシト云ウ」と記述されており、前方後円墳の可能性を示唆している。

江戸時代の名古屋城下では、南寺町の清寿院境内に取り込まれており、浪越山と呼ばれていたようである。元治2年(1865)には須恵器(有蓋の脚付短頸壺の完形品)が出土している。

その後は明治17年に愛知県の浪越公園、大正13年には名古屋市に移管されて那古野山公園として規模を縮小しつつ現在に至っている。

1.那古野山古墳　2.日出神社古墳　3.浅間神社古墳　4.大須二子山古墳　5.白山神社古墳　6.八幡山古墳
第2図　那古野山古墳の位置と周辺の古墳

Ⅱ　調査の経過

名古屋市農政緑地局では、造跡地である那古野山公園の整備事業を平成6年度内に行なうこととし、樹木の移植等で部分的には約50cmの掘削を予定した。

今回の調査は、その掘削による古墳墳丘への影響を確認するためのものである。

調査方法は、掘削を最小に抑えることを前提としたため、墳頂から北斜面に向かってトレンチ1本(幅約1～1.2m、長さ約9m)を設定し、人力とバックホウによって掘削した。

《日誌抄》

1月27日(金)　発掘器材の運搬。中嶋造園土木㈱と現地で打ち合せ。

1月30日(月)　トレンチ位置を設定後、掘削開始。部分的には断面を写真・実測し、埋め戻し。

1月31日(火)　掘削完了。断面の写真・実測後一部埋め戻し。降雪のため、午後2時にて作業中止。

2月1日(水)　平面図・断面図作成。完掘状況の写真撮影。

2月2日(木)　埋め戻し。

写真1　調査前　(墳頂より)

写真2　調査風景　(墳頂より)

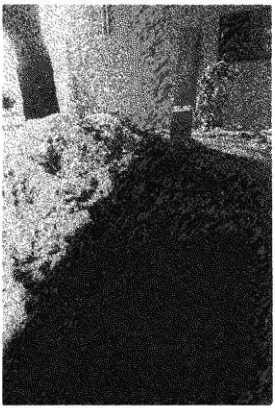
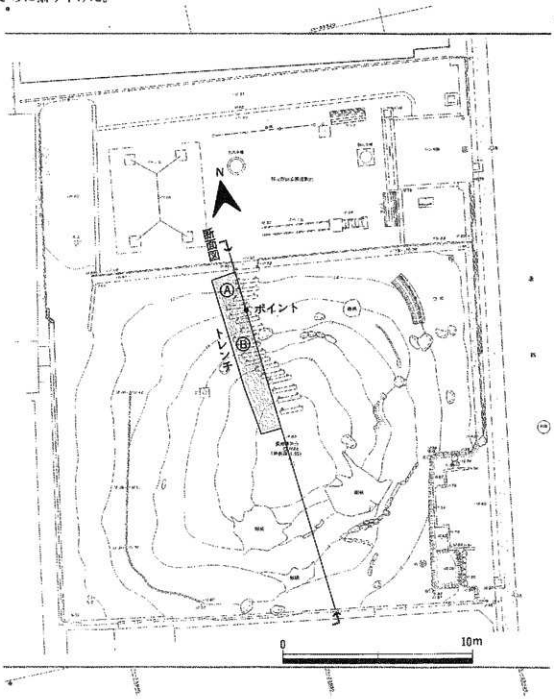


写真3　墳頂付近の様子

Ⅲ　調査の内容

当初は、表土を除去し、古墳の封土が確認できた時点で掘削を中止する予定であったが、表土直下は古墳の封土ではなく、中世から近世の盛土であることが調査開始直後から明かとなった。従って、この中近世の堆積土がどの位の厚みなのか、そしてその下に古墳が残存しているのかどうかの調査となった。

まず、トレンチ全体を約60cm人力によって掘り下げたが、すべて中近世の盛土であり、古墳時代以前の土には至らなかった。この時点で、墳頂部に近いトレンチ南半のさらなる掘削はあきらめ、バックホウのアームのとどくトレンチの北半部分についての掘り下げとした。ところが、深さ1.5mを越えても古墳時代の土に至らず、北半部分についても全体を下げていくのは不可能で、2ヵ所(北からA・B地点とした)に限ってさらに掘り下げた。



第3図　墳丘図および調査区位置図 (1：200)

結果、薄い表土層以下厚さ約２ｍまでは、中世～近世(①～④層および⑧～⑩層で、中世と近世は厳密には区別ができなかった。)の盛土であることが出土遺物から明かとなり、その下にA地点では古墳時代遺物を包含する層(⑤⑥層)を確認した。またB地点での下層(⑪～⑭層)は遺物の出土はなかったが、均質の黄色～褐色の土が互層になって堆積しており、古墳の墳丘の可能性も考えられる。

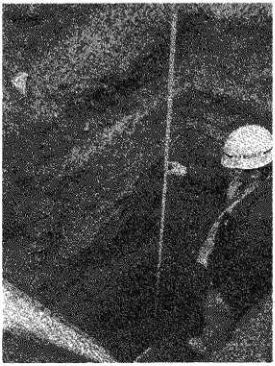


写真４　A地点での堆積状況

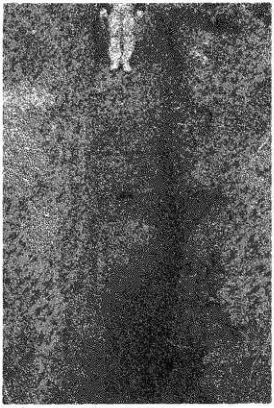
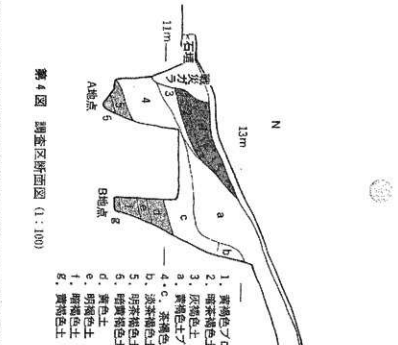


写真５　B地点での堆積状況



第４図　調査区断面図（1：100）

Ⅳ　出土遺物

各層出土の遺物は以下のとおりである。

①②層……近世いぶし瓦片・山茶碗片

③④⑤層……中世陶器片・土師器皿・埴輪片・須恵器片

④⑥層……中世陶器片・埴輪片・須恵器片・縄文土器片

⑤⑥層……須恵器片・埴輪片

⑦～⑧層……遺物の出土なし

古墳の年代を推定する遺物としては、⑤⑥層出土の須恵器片・埴輪片が最も参考になろう。ただし、いずれも小破片で十分な資料とは言いきれない。

須恵器はたちあがり外面に波状文をもつ杯蓋の小破片が1片のみ。埴輪は、タテハケ後回転ヨコハケの外面調整(写真6)を施す円筒埴輪(赤塚編年C系統)と、B種ヨコハケの外面調整(写真7)を施す円筒埴輪(赤塚編年B系統)が出土している。

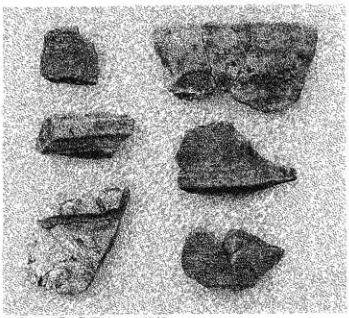


写真6　⑤･⑥層出土の埴輪

写真7　⑤･⑥層出土の埴輪

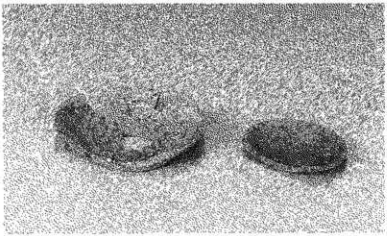
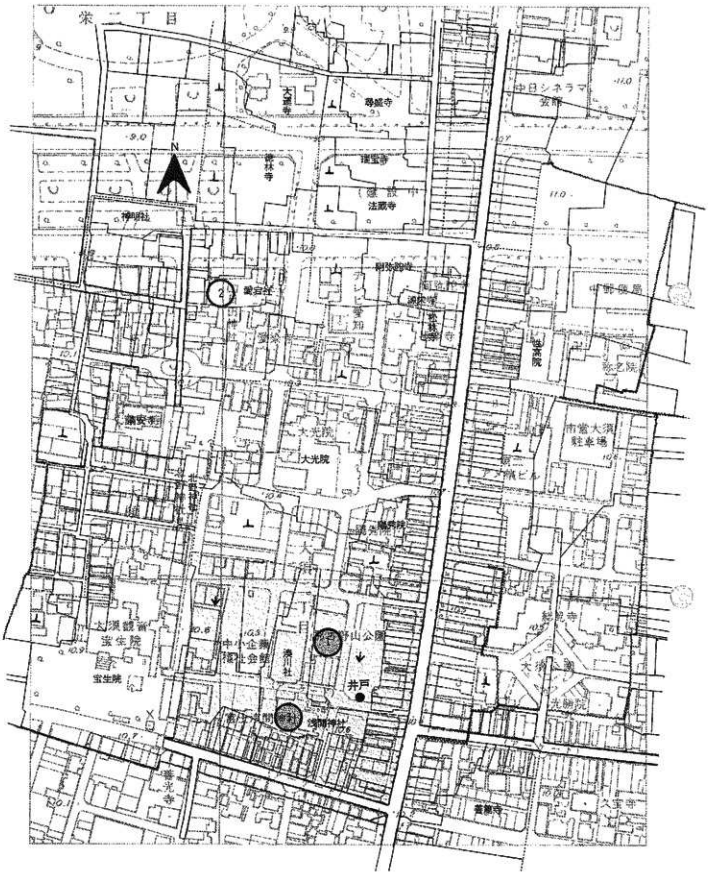


写真8　出土の中近世土師器

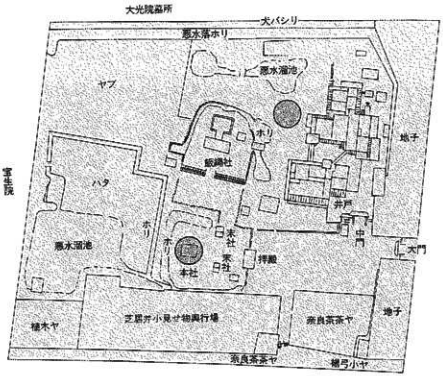
〈参考〉



1．那古野山古墳　2．日出神社古墳　3．浅間神社古墳　　地割は明治17年、地図は昭和56年

第5図　古墳と寺社地と明治の地割（地割図のトレースは伊藤厚史氏による）

第6図　『尾張名所図会』（天保15年＝1844年）にみる清寿院の様子
アミは現在の那古野山古墳（上）と浅間神社古墳（下）の推定位置



第7図　浅間神社作成の境内図（明治5年）○は現在の那古野山古墳(上)と浅間神社古墳(下)の推定位置

これらの遺物の年代観から、おおむね5世紀中～後半頃の年代を推定しておくのが妥当であろう。

なお、ⓒ層からは縄文晩期の土器片が出土した。周辺ではあまり知られていない時代の遺物だけに、今後注意を要しよう。

Ⅴ　おわりに

調査の結果をまとめれば以下となる。

・現在古墳の墳丘と考えられた土の多くは、中世以降の盛土である。

・ただし、埴輪や須恵器など古墳に関連する遺物も多く出土することから、中世盛土の下、もしくは近くに古墳があることも確実である。

・具体的にはA地点の⑤⑥層、B地点の④～⑧層が古墳に関連すると考えられる。A地点の⑤⑥層は古墳の周溝、B地点の④～⑧層は墳丘の可能性があろう。

・古墳の年代は、少量の出土遺物から推定すれば5世紀中～後半である。

すなわち、5世紀中～後半の古墳を大幅に改変盛土したものが、近世の「浪越山」であり現状の「那古野山古墳」と推定され、古墳本来の墳形・規模を確認しようとするならば、マウンドの部分以外を広く含めた全面的な調査が必要であろう。

註

① 赤塚次郎　「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター　1991

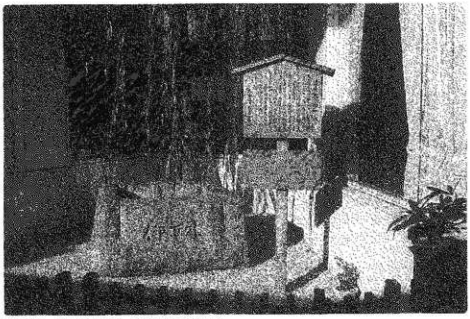


写真9　現在に残る 清寿院の梯下水

報告書抄録

ふ り が な	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	埋蔵文化財調査報告書25
シ リ ー ズ 名	名古屋市文化財調査報告32
編 者 者 名	平出紀男・水野裕之・伊藤厚史・服部哲也
編 集 機 関	名古屋市見晴台考古資料館
所　在　地	〒457　愛知県名古屋市南区見晴町47番地　TEL (052) 823−3200
発 行 年 月 日	西暦　1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
高蔵遺跡	名古屋市熱田区 高蔵町111	23100	12-2	35度 8分 16秒	136度 54分 21秒	1995.2.22～ 1995.3.24	120㎡	個人住宅
高蔵遺跡	名古屋市熱田区 沢上一丁目4−11	23100	12-2	35度 8分 9秒	136度 54分 28秒	1995.4.3～ 1995.4.28	160㎡	個人住宅
桜台高校遺跡	名古屋市南区霞町 28−2	23100	15-25	35度 6分 3秒	137度 56分 38秒	1995.3.9～ 1995.3.30	120㎡	個人住宅
桜小学校遺跡	名古屋市南区桜台 二丁目1501−2	23100	15-13	35度 6分 10秒	136度 56分 40秒	1995.2.13～ 1995.2.21	50㎡	個人住宅
那古野山古墳	名古屋市中区大須 二丁目1903	23100	7-8	35度 9分 23秒	136度 54分 15秒	1995.1.30～ 1995.2.2	11㎡	公園整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
高蔵遺跡	集落跡	弥　生	溝	弥生土器	
桜台高校遺跡	集落跡	室　町	土坑、溝	中世陶器	
桜小学校遺跡	集落跡	弥　生	竪穴住居	弥生土器	
那古野山古墳	古　墳	古　墳		埴　輪	

名古屋市文化財調査報告　既刊目録

I	H-101号古窯跡発掘調査報告	1973	品切
II	古沢町遺跡発掘調査報告　―弥生時代編―	1974	〃
III	御器所町古窯跡群発掘調査報告	1974	〃
IV	有松町並み調査報告	1975	〃
V	NK134号古窯跡発掘調査報告	1975	〃
VI	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976	〃
VII	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1979	〃
VIII	小糟古墳発掘調査報告書	1980	〃
IX	NN-278号古窯跡発掘調査報告書	1981	〃
X	名古屋市内の山車と神輿 民俗文化財調査報告書	1981	在庫
XI	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981	品切
XII	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982	在庫
XIII	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983	〃
XIV	笠ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984	〃
XV	名古屋の石造物	1983	品切
XVI	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985	在庫
XVII	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985	〃
XVIII	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986	〃
XIII	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986	〃
XX	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987	〃
21	白島古墳第II次発掘調査報告書	1989	〃
22	名古屋市守山区志段味地区民俗調査報告書	1989	〃
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990	〃
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993	〃
25	鳴海地区須恵器窯跡発掘調査報告書	1994	〃
26	名古屋市山車調査報告書１(熱田町湯水車)	1994	〃
27	NN330号窯発掘調査報告書	1994	〃
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994	〃
29	名古屋市山車調査報告書２(若宮まつり福禄舞車)	1995	〃
30	名古屋市山車調査報告書３(牛宮天王まつり牛頭天王車)	1996	〃
31	埋蔵文化財調査報告書24	1996	〃
32	埋蔵文化財調査報告書25	1996	新刊

名古屋市文化財調査報告32
埋蔵文化財調査報告書25
1996年３月29日
編集　名古屋市教育委員会
発行　名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目１番１号
印刷　竹田印刷株式会社